

第2章 添田町の維持向上すべき歴史的風致

本町は、古くから信仰を集める霊峰「英彦山」を擁しており、英彦山では中世に修験道が興隆したことで様々な社殿や宿坊が建ち並ぶ環境が形成され、麓では、英彦山への往来により街道沿いの市街地や集落が形成されてきた。これらの場では、神幸祭や伝統芸能等の様々な伝統的な祭り行事が盛んに行われており、これらの活動と歴史的な建造物等が一体として受け継がれていることで、本町独特の歴史的風致が形成されている。

このような本町の維持向上すべき歴史的風致は、下図に示すとおり全部で12の歴史的風致が見い出され、大きく「英彦山神宮にまつわる歴史的風致」と「添田本町地区と神幸祭にみる歴史的風致」、「英彦山水系流域と伝統芸能にみる歴史的風致」、「彦山踊りにみる歴史的風致」、「英彦山詣でと英彦山権現講にみる歴史的風致」、「高住神社にまつわる歴史的風致」の6つのテーマに分類することができる。

1. 英彦山神宮にまつわる歴史的風致

1-1. 柱松神事にみる歴史的風致

1-2. 御潮井採りにみる歴史的風致

1-3. 御田祭にみる歴史的風致

1-4. 神幸祭にみる歴史的風致

コラム1
峰入り（入峰）

2. 添田本町地区と神幸祭にみる歴史的風致

コラム2
白山宮の権現祭

3. 英彦山水系流域と伝統芸能にみる歴史的風致

3-1. 津野神楽にみる歴史的風致

3-2. 落合獅子楽にみる歴史的風致

3-3. 野田獅子楽にみる歴史的風致

4. 彦山踊りにみる歴史的風致

5. 英彦山詣^{もう}でと英彦山権現講にみる歴史的風致

コラム3
英彦山詣でと英彦山がらがら

6. 高住神社にまつわる歴史的風致

6-1. 神幸祭（豊前坊丑日祭）にみる歴史的風致

6-2. 豊前坊採^{さい}燈^と護^ご摩^ま供^くにみる歴史的風致

コラム4
豊前坊天狗

図 添田町の維持向上すべき歴史的風致の構成

1. 英彦山神宮にまつわる歴史的風致

江戸時代、隆盛を極めた英彦山修験道の中心的な行事である松会祈年祭は、かつては「御潮井採り」「柱松」「御田祭」「神幸祭」の順に行われていたが、明治維新の廃仏毀釈、神仏分離のため、山伏の離山、人口激減などで開催時期や形を変えつつも「柱松」や「御潮井採り」、「御田祭」、「神幸祭」として護持されてきた。

この神事は、英彦山神宮下宮の祭礼として、英彦山神宮奉幣殿から英彦山神宮銅鳥居を結ぶ参道空間において、往時の面影を保ちながら今日も厳粛に執り行われている。



英彦山神宮参道

英彦山神宮の歴史は古く、西国山岳霊場の中心として興隆したことに端を発する。鎌倉初期（13世紀）の『彦山流記』には「二百余宇禅庵輾軒 如望諸仏浄土莊嚴」とあり、英彦山には既に多くの行者が集い、軒を連ねて集落を形成していたことがわかる。大講堂や食堂、温室、経蔵などの中心仏堂などの名も見られ、中世初期までには彦山霊仙寺の門前として先達・講衆が多く坊を構えた南谷、北谷、中谷、惣持院谷を中心に山伏集落の完成を見た。また、大永5（1525）年に阿吸坊即伝が英彦山で「三峯相承法則密記」などの修験道儀軌を修して、以降西日本の修験道の規範となるなど英彦山修験道が室町時代までに隆盛を極めた。

しかし、戦国時代各地の武将に翻弄され、天正9（1581）年の大友義統の焼き討ちや天正15（1587）年の豊臣秀吉の九州征伐に際し、寺領没収の御難に遭った。しかし、秀吉死後前田玄以ら五奉行によって所領安堵されると、公家・大名の庇護を受け、一気に復興機運が高まった。特に、細川忠興が小倉に移封されると1100石の知行地が与えられ、元和2（1616）年には大講堂（現・奉幣殿）の再建、元和4（1618）年に大講堂本尊七体を安置した。また福岡藩黒田氏、小倉藩小笠原氏から知行地を得て、佐賀藩鍋島氏からは堂宇寄進を受けるなど藩主を外護の大檀那として取入れ、江戸幕府の宗教統制の「檀家制度」等と相俟って山中に多くの参詣者を迎えるに至った。



図 英彦山鳥瞰図（吉田初三郎）

寛文 11(1671) 年、山内の清浄化、風儀の取締りを強化し、「彦山町」を造り、店舗を構えさせて商人を定住化させて坊中や参詣者への便宜を図った。これとともに門前の形成も図られ、町より下の南側西谷、北側下谷の領域が江戸初期までに完成したとみられる。『彦山流記』には南谷、北谷、中谷、惣持院谷の 4 谷の名しかみえず、当初門前は北から南へと延びていたことがわかる。これに加え、江戸時代に西へと門前を延ばし山伏集落を形成した。この後も門前下にも新屋敷と称される坊屋敷が伸び、唐ヶ谷参詣道から日田道へと繋がり、多くの参詣者が門前に集った。銅鳥居も門前の拡充に併せ、貞享 3（1686）年、現在の位置まで 500m ほど下に動かしたといわれている。銅鳥居下に下乗石の立つ参詣溜り「勢溜」ができ、参詣者はここから駕籠や馬を降り、徒歩で参拝した。これにより英彦山は活気づき、檀家は九州一円に 42 万軒、末山は 70 カ所以上に達し、松会祈年祭の参詣者は 7 万人にもなったという。



図 英彦山門前町割りと主要建造物の配置『明治初年坊中屋敷図』

1-1. 柱松神事にみる歴史的風致

柱松は、松会の名の由来ともなる大柱を斎庭に立て、英彦山権現に万物成就を祈念するトーテム（表象）信仰の現れであった。文安2（1445）年の『彦山諸神役次第』によると、正月14日松盛座、正月26、27日の御潮井採り、2月5日松会ナラシ座、2月8日勅宣延年祭の後、2月13日に柱松起こしが行われていたことが記されており、室町時代には行われていたことが分かる。江戸時代の『英彦山大権現松会之図』にその様子が描かれている。



図 柱松起こし『英彦山大権現松会之図』（英彦山神宮所蔵）



図 幣切り『英彦山大権現松会之図』（英彦山神宮所蔵）

英彦山松会については、明治中期の『官幣小社英彦山神社古来伝来之祭典旧儀並音楽神楽等書上記』に詳細が示されており、松盛座については「陰暦正月十四日松盛座トテ、神事奉行所勤之両輪神官御田植司出仕…神事奉行へ対義之末、両輪御田ヨリ神事役割割其他祭祀二閑スル…年中諸祭典事務取扱、潮井採等祭事ノ儀ヲ神事奉行二協議シ、座主ノ命令ヲ受」とあり、その年の諸役の分担が決められる。これは、現在も2月14日に行われている。その後、旧暦正月26日～27日の御潮井採りで山内全山潔斎して、旧暦2月13日に「柱松起こし」が行われたことが見える。

明治維新後は山伏の離山から柱松神事として正月行事として行われるようになり、奉幣殿前の境内中央に柱が建てられ、1年の豊作と泰平を祈念する行事として行われている。

この柱松神事から始まる松会祈年祭が行われる英彦山神宮奉幣殿は、『奉幣殿棟札』によると、元和2（1616）年に小倉藩主細川忠興により、彦山靈仙寺の大講堂として再建された、英彦山の中心仏堂である。大講堂は、天平12（740）年に創建されたとされ、『彦山流記』（鎌倉初期（13世紀））によると「大講堂一字 二階 七間一丈二尺間」と記されている。「二階」とあることから2階建の大規模仏殿であったことが窺われ、現在の奉幣殿よりも高かったことがわかる。また、桁行は84尺となり、現今の74尺

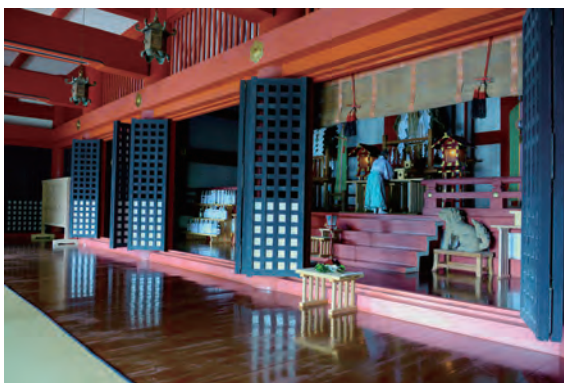


英彦山神宮奉幣殿（重要文化財）

よりも一回り大きな建物であったことがわかる。近年の発掘調査で、中世講堂の礎石跡に赤色顔料が付着していて、外装に赤色塗装が施されていたことが判明した。また、豊後大友義統率いる4千人の軍勢に焼き討ちに遭い、焼失したと伝えられていたが、このことを示すように礎石が焼けて被熱した痕跡がみられ、土間下からも炭化層が確認された。

細川忠興の再建以後も、歴代小倉藩主によって、営繕がなされている。寛永9（1632）年、小笠原氏が細川氏に代わり入封しているが、寛文4（1664）年には小笠原忠真により大規模修理が計画され、翌5（1665）年に完成した。奉幣殿の小屋裏に残る昭和9（1934）年の修理銘板「官幣中社英彦山神社奉幣殿重修記」には、この修理を含め小倉藩小笠原家による営繕は英彦山靈仙寺が廃寺となる慶応4（1868）年までに享保8（1723）年、宝暦13（1763）年、天明3（1783）年、文化6（1809）年、嘉永6（1853）年の合計6度に亘って改修が行われている。特に享保の修理では寄棟造の屋根構造を入母屋造に変更し、棟を一段と高くしたことが記されており、この時に掲げられたであろう奉幣殿の箱棟には、小笠原家の家紋である三階菱が装飾されている。明治元（1868）年の神仏分離にともない、英彦山靈仙寺は英彦山神社と改称したが、『彦山村戸長日記』によると、「大講堂」も明治8（1875）年には神社としての「奉幣殿」と改称されていることがわかる。しかし現在の奉幣殿にも寺院の講堂として機能が残され、内部は仏堂としての内陣と外陣に区別され、内陣は化粧垂木の天井で、一段高く祭壇（須弥壇）が設けられている。この祭壇に元和4（1618）年細川忠興が本尊釈迦如来、阿弥陀三尊、不動三尊を安置したことが近年台風被害時に後堂の部材とともに発見された釈迦如来本尊仏背で判明した。これらの仏像は明治8（1875）年講堂内の仏像とともにすべて焼却された。（『明治維新神仏分離史料』）

奉幣殿は英彦山の中心社殿として、現在も威風堂々たる大屋根に圧倒される。



奉幣殿（外陣から内陣祭壇を望む）

柱松起こしは2月13日に行われ、終夜大講堂の洪鐘を撞き、起夫40人が奉幣殿前の齋庭に長さ5丈8尺(17.6m)の巨大な柱松を建てた。柱の頂には青白2色の幣帛^{へいはく}が掲げられた。青は万物生成の春、白は万物成就の秋を象るとされる。また、柱には東西に二大龍王の大綱を張って、天地四序の和平を祈願する。松会の最後に、神事当役が柱に登って、御幣を燃す護摩採燈行事、一刀のもとに御幣を切放つ「幣切り行事」が行われた。

柱松は藁を縄で括り付け、須弥山に準えて33の節が作られたが、今は半分ほどの大きさとなっている。



図 柱松神事の活動場所



齋庭に建てられた柱松

現在の柱松神事は、大晦日午後5時に神職と総代により奉幣殿で大祓式を行う。その後、11時ごろから一般参詣者による除夜祭を行っている。神仏習合の名残で、奉幣殿横の鐘楼に掛けられた梵鐘を撞く。寺院の梵鐘のように撞棒は無く、木槌で撞く。参詣者は木槌を順次渡して撞いて行く。

梵鐘は千手院豪継が文禄3(1594)年に玉屋般若窟に奉納寄進したものであったが、その後豊前領主毛利九八郎吉勝が追銘し、英彦山霊仙寺に奉納した。以後、奉幣殿横の鐘楼で松会など祭事に撞かれてきた。今は大晦日除夜や神幸祭時鐘に撞かれている。



しめ縄が付けられた梵鐘（県指定文化財）

午後 11 時 45 分頃に「英彦山神宮奉幣殿」で採火式があり、殿内で炬火に採火すると、その火で宮司が柱松上部の松明に点火し、元旦午前零時の合図とともに奉幣殿齋庭に集まった参詣者が一気に引き起こすという形に変わった。最後に四隅の綱元に笹竹御幣が付けられる。柱松は正月三日間境内に立てられ、正月詣での参詣者がお参りしている。



柱松神事（柱松起こし）



齋庭に建てられた柱松

万物の生成を祈り五穀豊穰、平穏を願うため、英彦山権現の出御抛り所となる御柱を齋庭に立てる柱松神事から松会は始まる。柱松神事は、梵鐘の鐘の音から始まり、奉幣殿の齋庭に建てられた柱松に浄火が灯されると、暗闇の中に奉幣殿が浮かび上がる。厳かな雰囲気の中、新しい春に祈りを捧げ、平穏成就に合掌する人々の情景が今もなお脈々と受け継がれている。

1-2. 御潮井採りにみる歴史的風致

英彦山神宮の御潮井採りは、往時英彦山最大の行事であった「勅宣度松会祈年祭」の前行として行われる行事であった。今も御田祭、神幸祭の前のお浄めのため「山中祓い」をする神事である。

文安2(1445)年の『彦山諸神役次第』によると、旧暦1月14日の松盛座で当役を決め、26・27日から晦日にかけて、今川、祓川流域の九里八丁(36km)の道程を辿り、行橋市沓尾浜の姥ヶ懐へ出向き御潮井採りを行う。『英彦山大権現松会之図』にその様子が示されていることから、室町時代には行われていた。正月晦日に持ち帰った「御潮井」によって山内一円の清め祓いがなされると、2月朔日には松会注連おろし、2月5日に舞楽、8日に松会ならし座が持たれ、11日から三日間の増慶御供、そして13日には大講堂庭前に巨大な柱松が立てられ、14日から二日間にわたる松会を迎える、という流れであった。江戸時代に著された『吉書集義』には「潮井下之事」として詳細な規式が記されている。



図 松盛当役受杯『英彦山大権現松会之図』(英彦山神宮所蔵)

現在も2月14日に松盛座で当役を決め、2月末日から3月1日にかけて、英彦山神宮の神職2名と出仕3名からなる御潮井採りの一行5名が、白装束にわらじ履きといういでたちで、「英彦山神宮潮井採神使」の幟を手に出立する。一行は奉幣殿での参拝を済ませると上宮本殿、下宮への拝礼の後、英彦山町への挨拶を済ませ、北坂本の「七大童子社」へと向かい拝礼を行う。



奉幣殿、英彦山権現へ拝礼する様子



幟を手に山中挨拶をして出立する様子

七大童子社は、英彦山修験道の北坂本門口にある末社殿である。古来、英彦山秋峰葛城修行を守護する七童子を祀る堂として建立された。地元である北坂本地区によって営繕されてきたが、昭和 36 (1961) 年焼失により宝殿は基壇のみとなっている。焼失後、翌年に入母屋造、銅板葺、二間規模の拝殿を再建した。拝殿奥に祭壇を設け、焼失を免れた祭神七大童子の尊像を祀り、11 月に坂本神社祭（童子講）が行われている。



七大童子社

七大童子社を参詣後、御潮井採りの一行は、上津野セツ石道を下って「上津野高木神社」（旧彦山大行事社）、下津野高木神社を神事参詣する。



上津野高木神社



下津野高木神社

下津野高木神社を参詣後、御潮井採りの一行は、赤村地蔵の木の接待座の後は峠道に入り、道中第一とされる接待座が行われるみやこ町喜多良四宮八幡宮へ赴き祭典を執行する。この後、行橋市福原で饗応の後、夕暮れに地域の人々の炬火で今井市場まで向かう。道中では法螺を吹きながら門祓い、屋祓いを行う。今でも「英彦山やんぶしさん」がいらしたと迎え、無病息災として「貝伏せ」といって法螺吹奏後、頭に法螺貝をかぶせてもらう、お礼に法螺貝に賽銭を入れるといったことが行われている。今井市場（熊野神社御旅所）での接待座の後、提灯を提げた今井市場の人の案内で、「今井の宿奥家」へと着く。



昭和 40 (1965) 年頃の御潮井採り道中の様子



昭和 40 (1965) 年頃の貝伏せの様子



表 御潮井採り道程（往路）

立ち寄り場所の名称	所在地
1 英彦山神宮	添田町
2 北坂本七大童子社	
3 上津野高木神社	
4 下津野高木神社	
5 地藏木	赤村
6 峠	みやこ町
7 喜多良四宮八幡宮	
8 本庄	
照日坂	●
難行原	●
9 長陽釜割池・大山神社	行橋市
10 泉中央・福原	
11 五社神社	
12 東泉・柳井田	
13 清池神社	
14 今井市場	
15 今井宿・奥家	
16 沓尾・姥ヶ懐	

表 御潮井採り道程（復路）

立ち寄り場所の名称	所在地
15 今井・奥家	行橋市
17 今井西公民館	
18 金屋・春日神社	
流末	●
花熊	● みやこ町
19 生立神社	
20 油須原	赤村
5 地藏木	
4 下津野高木神社	添田町
3 上津野高木神社	
2 北坂本七大童子社	
21 別所	
1 英彦山神宮	

●：今は立ち寄らない場所

今井宿では二手に分かれて宿入りする。これは古来より英彦山神事が「色衆・刀衆」といった陰陽によって執り行われていたことによるようで、2軒の「奥家」が決められている。この際、両家では陰陽合体を意味する「入れ違いの儀」が行われ、しめ縄を張った桶の中にお神酒1本、潮吹貝2個を奉書に包み箱に入れて取り交わす神事がある。宿では英彦山神宮の御神号が掲げられた床の間に供物が安置され、神前祓いが行われる。その後英彦山から持参した「音物」（木札、宝印など）が両家に贈られる。深夜、杳尾浜まで向かうが、宿人が提灯を掲げ今井大橋まで見送る。この後は深秘とされ、何人も見てはならないと伝え、「見たものは目がつぶれる」といって、道筋の人家は戸を閉ざし、垣間見ることも許されない。一行は姥ヶ懐まで行き、禊を行い2尺ほどの竹筒に潮を汲んで宿へと持ち帰る。



入れ違いの儀



杳尾浜姥ヶ懐御潮井場（福岡県行橋市）



接待座前の貝伏せの様子



接待座の様子

翌朝、今井西公民館で祭典を行い、金屋・春日神社に向かう。ここの接待座では「きなこ餅」などが振舞われ、ここで「潮井玉」と呼ばれる土産のハマグリ、潮吹貝、ワカメなどを受け取り、往路と一部経路を変えながらみやこ町「生立神社」へと向かい、赤村油須原で接待座の後、復路をたどり、津野高木神社へと戻ってくる。津野高木神社以降の接待を「サカ迎え」と呼んでいる。これは「酒」、「境」の意味に捉えられ、神使を労い村境まで迎え接待したことに由来すると思われる。一行は英彦山神宮に帰着し、「潮井玉」と「潮井」を神前に供えて行事が終わる。



金屋春日神社での祭典



上津野高木神社サカ迎え

翌日、持ち帰った「潮井」で門前山中祓いを行う。英彦山神宮銅鳥居や旅殿等の建造物の他、参道の要所を祓い、護法神、辻神や屋敷神を祓い清める。門前坊中の門祓いも行い、坊家の人々は清め祓いを受け、持ち帰った「潮井玉」を受取り、神前にお供えする。この後、英彦山では3月15日の「御田祭」、4月の「神幸祭」の祭の準備へと取り掛かる。



山中祓いの様子（3月2日に神宮から下りながら清め祓いを行う）

英彦山神宮銅鳥居は、参道門前を結界する英彦山神宮大門筋入口に位置する。鋳銅製の鳥居で柱間心々約6.0メートル、地盤面より貫下まで約4.5メートルで、柱は青銅製の円筒六個を積み重ね、中央部の総高は約6.76メートルである。柱の中空部分には石や砂をつめ、足元は根包みして繰り型となっている。貫は青銅製で3片組み合わせとなっており、島木の反りは柱より外に出た部分のみで、形式は明神鳥居である。左柱には「願主 從四位下行侍從鍋島信濃守藤原朝臣勝茂敬白」、右柱には「寛永第十四丁丑年八月吉日」などと刻まれた「文禄の役」で朝鮮被虜人として連れてこられ、勝茂公の右筆となった洪浩然^{こうこうぜん}の筆になる銘文があり、英彦山信仰の象徴として、寛永14（1637）年に佐賀藩主鍋島勝茂が奉納寄進したことがわかる。一説によると、もとは現在の富士屋旅館付近にあり、門前の拡大とともに貞享3（1686）年に現在地へ移したと言われている。その際に、円筒を各1個はずしたため総高が低くなり、全体的にずんぐりとした形になったとも言われている。この鳥居前の広場を「勢溜」といい、参詣者の溜まりとなった場所で、「下乗石」が示すように、ここで籠、馬をおり、徒歩で参詣した。



英彦山神宮銅鳥居（重要文化財）

また、参詣者の道案内と不浄のものが入らぬよう「点合護法」神が傍らに祀られ守護している。鳥居正面中央の島木と貫の間に金文字の「英彦山」の額が掲げられている。この額は享保 19（1734）年に霊元法皇が下賜したものである。勅額の上部横幅は約 2 m、高さが約 2.4 m、下部横幅が約 1.3 m の大額で、額縁には 8 箇の菊花御紋章を配し、「英彦山」の 3 文字は一乗院ノ宮の御清書を象ったものである。記録によると、天明 3（1783）年に修理されている。また、鳥居は昭和 27（1952）年に破損した島木や笠木等の銅板の張り替えが行われ、同 44（1969）年には解体修理が行われている。



点合護法神



鳥居に掲げられる「英彦山」の額

英彦山神宮の御潮井採りは英彦山権現が山から下り、沓尾浜で禊祓いをして山と海を融合させた。御潮井道中の村々は、「英彦山やんぶしさん」の法螺の音を聞くと春田を鋤き「田植え」準備に取り掛かり、今でも豊前「京都平野」の春迎え行事となっている。冬空の厳しい寒さが残る中、5名の御潮井採り一行が九里八丁の道程を往来し、神社を神事参詣したり、持ち帰った御潮井で銅鳥居をはじめ門前山中を清め祓いする様子から、今なお権現信仰が強く息づいている情景が見られる。

第2章 添田町の維持向上すべき歴史的風致

1-3. 御田祭にみる歴史的風致

御田祭は松会の最後に執り行われる行事で、江戸時代までは旧暦2月15日に神輿の還幸が行われ、神輿が斎庭に到着して神輿休めに安置されると、御田司が田植えの所作を英彦山権現に奉納して五穀豊穡を祈願する予祝行事であった。

古来、御田祭は下宮に奉祀された英彦山十二所権現に奉納する神事であったことに由縁して前日の3月14日に英彦山神宮奉幣殿前に下宮方向を正面として四方に笹竹を立て、しめ縄を張って約15.6坪の御田を作ることから始まる。文安2(1445)年の『彦山諸神役次第』によると、室町時代には旧暦2月15日に行われていたことが見え、江戸時代の『英彦山大権現松会之図』にはその様子が詳細に描かれている。奉幣殿昭和大改修が行われた昭和8(1933)年には下宮の境内で御田祭が行われた写真が残されている。

英彦山神宮下宮は、英彦山中腹、奉幣殿すぐ上の平地に鎮座している。『彦山流記』(鎌倉初期)には「当山下宮者、(中略)宝殿拝殿各八間檜皮葺、三所権現 白山 大行事 玉屋 大南 智室 鷹栖 北山 正體金銅像 皆安置彼社壇」とあり、その他中宮、竹台権現(豊前坊)を加えた12社の祭神所謂彦山十二社権現を祀っている。彦山流記に見える社殿は永禄11(1568)年に焼失し、以後慶長10(1605)年に再建され、安政4(1857)年に建替えが行われた。中世の建物は社殿、拝殿とも8間規模の壮大なもので、桁行では現在の奉幣殿を凌ぐ規模であったことがわかる。現行建物は社殿3間社流造、銅板葺の建物で、幣殿から拝殿と続く。拝殿は桁行5間、梁間2間、切妻造、銅板葺である。神幸祭でその十二社権現の御神体が3基の神輿によって旅殿まで渡御還幸するとしめやかに御田祭が執り行われる。



英彦山神宮下宮

江戸時代の『吉書集義』では旧暦2月15日にお上りの神輿が神輿休めに還幸すると「祈年御田祭」として執り行われていたことが記され、祭りの様子は寛政4(1792)年の英彦山安住院本を模写して平戸藩主松浦家が奉納した『英彦山大権現松会之図』に詳細に描かれており、往時の姿が容易に見て取れる。この御田祭は明治維新後に英彦山神宮の祭事として3月15日に執り行われるようになった。

御田役である氏子総代は前日の3月14日に御田習礼(練習)を行う。当日3月15日の御田祭では10時半に社務所から出立する折に宮司、祭員、総代御田役による浄めの「手水の儀」を行った後、奉幣殿へ向かい、内殿での修祓後祭員神官が御田祭具、斎田を清め祓い、その後一同が斎庭に降りて行事が始まる。

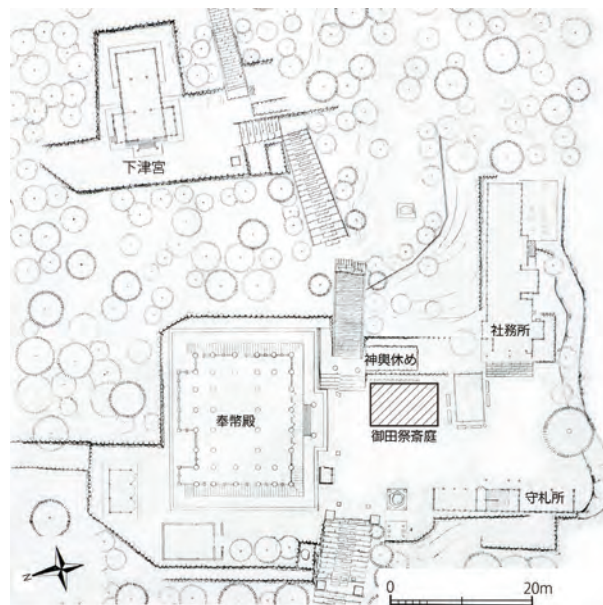


図 御田祭斎庭位置

御田行事は、「^{くわ}鋤入れ」、「^{あぜ}畦切り」、「田打ち」、「^{まぐわ}畦塗り」、「^{えぶり}馬杷」、「^{たね}杵」、「^{さおとめ}種子まき」、「御田植え」、「^{いいかぐめ}飯戴」、「^{しるかぐめ}汁戴」、「^{さおとめ}早乙女の舞」の順序で行われる。

「鋤入れ」は、御田役1人がサカキ・ユズリハ・松枝を一束にした神捧を持ち、鋤を肩に抱いて上宮を拝礼し、その束を地上に置いて鋤で土をかける所作をする。その折、神職により、「^{くにつち}国土のひろき荒野を田になして鋤のみほこにつゆの玉よね」の御神歌が歌われる。

「畦切り」は、御田役1人が鎌を持ち、御田の四隅で畦の草を刈る所作をする。

「田打ち」は、御田役数名が一行に並び、後にさがりながら、鋤で田を耕す所作をする。



田打ち行事の様子



図 田打ち行事
『英彦山大権現松会之図』（英彦山神宮所蔵）

「畦塗り」は、御田役1人が鋤を持ち、御田の四隅で田の畦を塗り固める所作をする。

「馬杷」は、田を^す鋤き^{なら}均す所作で、御田役2名が木製の牛を引き、他1名がその後ろに馬杷を持って続き、斎庭を一巡する。その際、神職により、「^{まぐわ}塊を^{やつかほ}なおこまやかに砕けとて教えの馬鋤に八束穂の稲」の御神歌が歌われる。



馬杷行事の様子



図 馬杷行事
『英彦山大権現松会之図』（英彦山神宮所蔵）



馬杷の様子（昭和8（1933）年）

「杓」は、御田役1人が杓を持ち、四隅で田をかきならす所作をする。

「種子まき」は、御田役1人が三方に載せられた種^{もみ}粃を斎田の四隅に蒔く。その時、御神歌が入り「彦の高嶺^{いつほ}に五穂^{みたね}の御種子^{しわざ}、手にぎりみたからの仕業^{おしほね}教えし忍穂根の初のみふゆをあおがれて、尊^{とうと}みまつれ四方の諸人^{よももるびと}」と歌われる。

『英彦山文書』には「粃種子一石ヲ献備」、「此ハ古来慣行ニ依テ御田植始ニ種子蒔行事ヲ修シ、各々種粃ヲ拝受シテ諸国参詣講社社員ヨリ信徒ヘ分配シテ、例之種子浸ニ指加ヘ、年穀ノ繁殖豊熟ヲ禱ル習アリ」ということから、一石（150kg）もの粃種を用意し、代参者が村内に持って帰り、九州一円の信者に配り、自家の神前に供えたり、種粃に加えて豊作を祈って植えたことがわかる。参拝者はこの粃種をもらって豊作の守護とする。



種子まき行事の様子



種子まき行事の様子（昭和8（1933）年）



図 種子まき行事『英彦山大権現松会之図』（英彦山神宮所蔵）

「御田植え」は、御田役7人が一列に並んで、早苗にみたてた7把^はの石菖の葉を足もとに並べて植える所作を行う。7人の御田役が1人7把を植え、合計49把の苗が斎田に植えられる。この際、御神歌が入り「年の初めに空みれば時しる雨の降るにつけ、種子まき田植え忍穂根の神のおしえのふることを、今にまぬびて二月の彦の祭りに初めそめけり」と歌われる。この石菖の葉は、参詣者がもらって自家の神前に供えて豊作を願う。



図 田植行事『英彦山大権現松会之図』（英彦山神宮所蔵）



田植行事の様子（昭和8（1933）年）

「飯戴、汁戴」は、種子まき行事が終わるころ、御田上臈^{じょうろう}といわれる女役が手ぬぐいで頭を「姉さん被り」にし、着物のおなかを膨らませた妊婦姿で現れる。頭には飯を盛った御椀を入れたはんぎり（浅い桶）を乗せている。この妊婦（^{はら}孕み）姿は「孕みと実り」が同意義として頭に飯を掲げるものである。頭の上のご飯を食べると無病息災になるということから、この妊婦役の女性が御田斎庭脇に座ると、観衆は競って戴こうとする。戴いたこのご飯は、自家の神前に供えて豊作を願う。



飯戴の様子



競ってはんぎりからご飯を戴く人々

この他に、現在は行われていないが、『英彦山大権現松会之図』には汁戴の様子が描かれている。



図 飯戴、汁戴
『英彦山大権現松会之図』
（英彦山神宮所蔵）

「早乙女の舞」は、明治期に取り入れた神事で、女兒が緋の着物に黄色の帯を締め、赤のたすき、緑の手甲・脚絆、白足袋にわらじをはき、手ぬぐいを頭にかぶり、菅笠を持って舞う。舞うときに「早苗とるしずが菅笠いにしえの手振りおぼえてなつかしきかな」と歌う。なお、この歌詞は、明治天皇御製で、昭和3（1928）年の昭和天皇即位御大典記念の際に各地で舞われた。



早乙女の舞

御田祭は田植え神事として佐賀や大分、福岡筑後地域の穀倉地帯農村部を中心に権現講や代参講として参詣者が多く来山している。奉幣殿の境内に注連縄で田に見立てて形作られた斎庭は、山中の静けさとわずかな日の光が注がれ、そこで行われる田植えの所作は多くの参詣者の熱い視線が注がれている。参詣者は種子まき行事の種粃や飯戴のご飯、田植え行事の苗に見立てた「石菖」をもらい、ともに自家の神前に供えて豊作を願う。現在も田植え前に英彦山詣でを行い、英彦山権現に豊作祈願をする情景が見られる。

1-4. 神幸祭にみる歴史的風致

英彦山神宮の神幸祭は平安時代に増慶上人^{ぞうけいしょうにん}が創始し、彦山十二社権現が「下宮」から御幸する祭礼として行われた。文安2(1445)年の『彦山諸神役次第』には正月14日松盛座で当出仕が決まると旧暦2月14、15日に執り行われたことが見える。現在は2月14日に松盛座で当出仕を決め、4月中旬の土曜日、日曜日の2日間にわたって執り行われている。江戸時代の『英彦山大権現松会之図』にはその様子が詳細に描かれている。神幸祭は、英彦山神宮奉幣殿前から大門筋銅鳥居の北側横にある御旅所まで、門前参道を2日間にわたって三基の神輿が往来する。その際、稚児舞や鉞舞、獅子舞、流鏑馬が奉納される。



神幸祭典の様子
(昭和10年代(1935～1944))



神輿のお下りの様子
(昭和10年代(1935～1944))

神輿が渡御還御する参道沿いには、県指定有形民俗文化財である財蔵坊や楞嚴坊、指定名勝 英彦山庭園の構成要素1つである庭園を保有する顕揚坊や古式坊舎の増了坊、松養坊、浄境坊が立ち並んでおり、参道に面した棟門の奥に祈祷道場と宿舎を兼ねた「客殿」と日常生活の場「内證」を鍵屋で繋いだ坊舎、客殿前に配された庭園が往時を偲ばせる。坊舎とは山伏法師として僧団に一定の資格を認められた僧を師とし、その弟子たち、労役に従事する下級の僧、俗体の下男下女までを含めた小組織の本拠となる場所であった。また山伏法師を導師として英彦山に結縁した下界の信者たちが本山に参詣したときには、加持祈祷の場となり、また農家の信者たちには珍しい料理や酒の馳走が振る舞われる場所でもあった。



昭和初期の英彦山門前坊舎群



参道の様子



参道からみた宿坊の様子

神輿がお下りになる旅殿は、^{しもみや}下宮彦山十二所権現の御旅所で、神幸祭神輿が御幸する場所である。旅殿については建物の東南脇にある『石碑』に「奉造営彦山権現御旅殿并寶道」と有り、文禄2（1593）年の造営銘が初見である。以降、英彦山神社記録には正保2（1645）年、元禄3（1690）年に営繕されていることが判る。現行建物は『下谷鎮花祭記録』から明治12（1879）年に再建されたことがわかり、規模は桁行4間、梁間3間、入母屋造、麦藁葺、正面吹放ちの建物で、昭和50（1975）年に鉄板葺にした。旅殿敷地東にはひょうたん形をした指定名勝英彦山庭園の構成要素の1つである庭園があり、庭園を背景に祭事が勇壮に執り行われていたものと思われる。



旅殿



旅殿造営石碑（文禄2（1593）年）

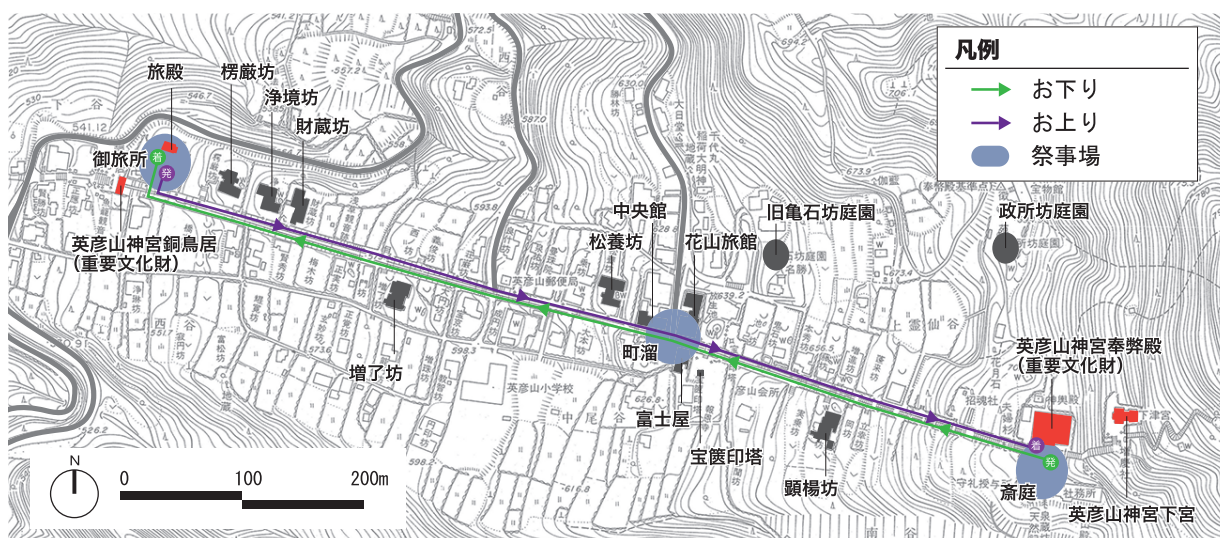


図 英彦山神宮門前町と神幸祭渡御還

1 日目のお下りは、午前 10 時に氏子総代が集まり神輿の飾り、御供岩にしめ縄を張って準備をする。12 時に一番鐘の梵鐘を鳴らし、12 時 30 分に二番鐘、午後 1 時の三番鐘の後、奉幣殿で内殿祭、神輿に御神璽を遷座をする御発輦祭、下宮横の御供岩に神飯を供え、御神鳥の鷹が啄ばむまで御発輦出来ないという故事から「増慶御供の儀」が執り行われる。2 時、奉幣殿前で駕輿丁役が整列すると太鼓持の合図で壱ノ殿、弐ノ殿、参ノ殿と御発輦する。神輿の前には往時さながらに先導役の散使、御幣持、水王・火王持、旗持、傘持と続き、獅子持、鉞持が下って行く。



神輿御発輦祭の様子



太鼓持、旗持、水王・火王持のお下り



神輿お下りの様子



図 神輿行列『英彦山大権現松会之図』（英彦山神宮所蔵）

参道途中にある花山旅館や富士屋旅館付近の町溜につくと、神輿休めが行われ、参詣者による神輿参拝が行われる。

神輿休めでは女兒による稚児舞が行われる。稚児舞は、白の着物に緋の袴をはき、萌黄色の狩衣を身にまとい、^{ようらく} 璫珞をかぶり行われる。所作は、左手の鈴を振り、神職の叩く太鼓にあわせて三步進んでは一呼吸立ちどまる。これを繰り返しながら、約3分間S字型に進むのである。『英彦山大権現松会之図』には、神楽役である彦一坊神楽が描かれており、その姿は先頭の女兒に似ており、両手の持物も同じである。このことから、稚児舞は彦一坊神楽の名残と考えられる。



神輿休めでの稚児舞



御旅所での稚児舞

神輿が御旅所に着くと旅殿に安置され、守護神である水王・火王面や御幣を柱に取り付けて、旅殿着御祭が行われる。その後、神前で稚児舞、獅子舞、鉞舞が奉納される。

旅殿では直会が行われ、神官と総代2名が宿直となる。



御旅所着御の様子



旅殿の神輿着座



鉞舞奉納



獅子舞奉納

翌日のお上りは、午前8時に宿直神官、総代により朝御饌祭^{みけさい}が行われ、12時に一番鐘、12時30分に二番鐘、午後1時に三番鐘が撞かれる。1時20分から御還御発輦祭の後、2時にお下りとは逆に参ノ殿から御発輦になる。町口で神輿御駐輦があり、お下りと同様稚児舞が奉納される。

斎庭に神輿が着御すると神輿休めに安置され、獅子舞と鉦舞が奉納される。



図 神輿休め『英彦山大権現松会之図』（英彦山神宮所蔵）

獅子舞は、雌雄一対で胴には二人が入って舞い、古来は樂があったことが絵巻に描かれている。獅子頭は、筑豊域に分布しているものよりずっと大きく、雄獅子は、横幅 55cm、高さ 45cm、重さ 35kg である。雌獅子はやや小さい。獅子頭に紺地横じまの布を胴にして、前立ちの衣装は白衣・白袴に白足袋である。

所作は、獅子頭の口を上にしたまま、神輿に頭を向けたりしながら場内を一巡する。二巡目は「おまねき」といって、神輿や宮司の前に来ると拝礼するように、肩に立てている獅子頭をお辞儀するような所作を見せる。その後、頭を振りながら口を大きく“ガッ”と開く所作を5回繰り返す。雄獅子が終わると雌獅子が入場して同じ所作を行う。奉幣殿前の最後の獅子舞は「三度がえり」という舞がある。雌獅子は舞い終わるとすぐ、下宮へ向かう石鳥居^{ほうこう}の石段をかけあがり、最後に山頂の方に向かって3回口を開き、咆哮する舞を行う。これは、雄獅子が雌獅子を残して南方から渡来するとき、雌獅子が後を追う場面を表わしたものであり、狂ったように咆哮することから「名残の狂」と言われる所作である。



獅子舞の様子



図 獅子舞
『英彦山大権現松会之図』（英彦山神宮所蔵）

鉞舞は、白の上衣・袴の2人の演者が向かい合い、鉞を大きく振り打ち合う。その所作演目名は、10番まであり、カタアゲ、キリメグリ、ワタシ、ハアワセ、ヒラアワセ、エアゲ、サンゴノイン、タタギリ、カキ、オイマワシの所作を行う。この中で、印を結び九字を切る所作をするサンゴノインに修験道の名残を見ることができる。この他に、長刀の舞、金棒の舞などがあったことが絵巻に見られる。



図 鉞舞
『英彦山大権現松会之図』(英彦山神宮所蔵)



鉞舞の様子



鉞舞の様子(昭和10年代(1935～1944))

行事の最後には、流鏝馬が執り行われ、一連の神事が終わる。

流鏝馬は、氏子総代が騎手になり、烏帽子・狩衣姿で乗馬し、奉幣殿前広場の四隅で、1本ずつ空に向けて射る。人々は、矢を競って拾おうとする。



図 流鏝馬『英彦山大権現松会之図』(英彦山神宮所蔵)



流鏝馬の様子



流鏝馬の様子
(昭和10年代(1935～1944))

英彦山松会の神幸祭では英彦山権現が出御し、還御すると御田祭により平穏安泰、豊穰が祈念された。今でも、英彦山神幸祭は豊穰を祈念して英彦山権現を移した神輿が、宿坊や豊かな森林に囲まれる石段の参道を勇壮に上り下りする。その道程では、奉幣殿や旅殿の斎庭で軽やかな鈴音の稚児舞、優雅な獅子舞、凜として潔い鉞舞が奉納されており、今なお英彦山権現を讃える情景が受け継がれている。

コラム1 峰入り（入峰）

■英彦山における峰入り

修験道の中で最も秘儀とされる行事に峰入りがある。峰入りとは、山伏が行場を巡り、断崖絶壁での荒業や断食等を行う山中修行のことで、その成立は、古代から中世であり、仏教の影響を強く受けている。つまり、仏教に置ける精神世界と現実世界を合体しようとする修行が峰入りであり、英彦山の峰入りは熊野・大峰山・吉野における大峰入りに由来があると言われる。峰入りは、大日如来を中心とする仏菩薩の曼荼羅を山岳に展開しており、大峰入りでは、「胎蔵界」を熊野、「金剛界」を吉野とし、その二つを結ぶ大峰山における修行を通じて山伏は即身即仏となり、民衆を済度するための厳しい修行をしていたとされる。

英彦山では、熊野・大峰山・吉野における大峰入りにならって英彦山を「胎蔵界」、宝満山を順峰の「金剛界」、福智山を逆峰の「金剛界」とした。順峰は、「春峰」や「胎蔵界入峰」とも称し、英彦山を拠点に宝満山へ往復する2月15日～4月初旬（近世は4月9日）までの入峰を指す。同じルートを3月10日駈入の「順逆不二峰」は「夏峰」や「華供峰」とも称する。逆峰は、「秋峰」や「金剛界入峰」とも称し、7月晦日に駈入、英彦山から福智山へ往復する（近世は9月4日出峰）。双方とも往復約130kmの行程である。これらを三季入峰と称し、順峰・逆峰ともにそれぞれ48宿を配置して仏となるための十界の修行を行った。英彦山胎蔵界から宝満金剛界、福智金剛界に出て、再び英彦山胎蔵界に戻る。このことは、「擬死再生」を意味し、峰入修行をすることで一度生まれ変わったということになる。峰入修行の回数は、山伏の位階にもつながり、三十六度で大越家と呼ばれる最高位に達した。この三季入峰が整った記録は、室町時代の文安2（1445）年に記された『彦山諸神役次第』が最初である。

■近年における峰入り

英彦山における峰入りは、『英彦山神社日誌』によると、明治維新による神仏分離以後は多聞坊により私的に伝承されていたことが分かる。その後、断続的に継承され、明治43（1910）年8月には大々的に秋峰が行われたと言い、その時の行場を結界する『股木』が残されている。その後、平成6（1994）年より継続的に修験春風会が福智金剛界への峰入りを執り行い、平成25（2013）年5月には150年ぶりに宝満山修験会により英彦山への峰入りが果たされた。今でもかつて英彦山の山伏たちが挑んだ古式修験道にならって山中を巡り、祈りを捧げている。



図 三季峰入りのルート

* 長野覚『英彦山修験道の歴史地理学的研究』を基に作成



股木

2. 添田本町地区と神幸祭にみる歴史的風致

添田本町地区の神幸祭は、夏の疫病退散や村中安全を祈願して、山笠の飾り付けの準備から、当日神輿の後を山笠が巡行、山笠の飾り付けを家に持ち帰って玄関先に飾る習俗が、地域の方々により毎年行われている。

添田本町地区の市街地の形成は、中世山城である岩石城の城下として形成されたことに端を発する。岩石城は、平清盛が大宰大貳であった頃、保元3(1158)年に大庭平三景親に命じ、添田町の東にある標高454mの岩石山の山頂を主郭として城館を築かせた。英彦山修験道の行場でもあった奇岩と急峻な山裾で構成され「豊前一の堅城」という要城であったことから、築城以降、菊池氏、大友氏、大内氏、秋月氏に攻められ、帰属を変更しながら、豊前の要城として存続する歴史を繰り返した。天正15(1587)年、豊臣秀吉の九州平定の折、4月1日に秋月種実の城将熊井越中守、芥田悪六兵衛らが守る城館を蒲生氏郷、前田利長は二万もの軍勢を率いて一夜にして陥落させた。岩石城陥落後、秋月氏、島津氏など悉く降伏し、秀吉が九州国分けをする発端となった。以降は小倉城の付城として存続し、豊前領主毛利勝信や初代小倉藩主細川忠興に支配されるが、江戸時代初期の元和元(1615)年の一国一城令により廃城となった。

この岩石城を中心として、その麓に位置する現在の添田本町地区などに城下町が形成された。添田本町地区を縦貫する不動川は、その上流に位置する不動滝に源流をなす川で、途中に不動池を形成するなど水量豊富で緑豊かな山麓を形成しており、難攻不落の岩石城の礎となった。『添田町誌』によると、江戸期まで不動川からの水流を湛えた堀割が添田本町地区の南側に形成されていたと示されている。また、不動池とその周辺は、現在添田公園として整備されている。



岩石城本丸跡



不動滝



図 添田における通称の地名と主要建造物等の位置

添田公園は、岩石山のもつ山谷林泉の美を活かして昭和6（1931）年に都市公園として開園した公園である。峰地炭鉱を興した蔵内氏の同族であった久良知妙真は、不動池やその周辺の岩石山の山麓に地藏尊を祀り、不動滝周辺の霊場園地整備を行い、大日寺として完成させた。公園の東南側に不動滝があり、この水が公園の南側に位置する不動池に流れ込み、西側に流れて不動川となる。不動滝は、高さ約30m、幅約2mでその水は清冷で、岩に砕けて飛沫する様子は盛夏でも涼を覚える。

また、不動池周りに多数植えられた梅の古木をはじめ、2,000本余の桜、4,000株余のつつじが春夏を彩り、秋には山麓の紅葉、蔦、ハゼなどが錦色に輝き、園地から添田本町地区への動線は趣のある情景を醸し出している。この風光明媚な情景は、岩石山の軽登山とともに多くの人々が訪れるハイキングコースとして活用されている。

公園区域内には、添田神社や白山神社等の神社が立地する他、美術館や体育館等の公共施設が立地し、多くの方が訪れている。



不動池



図 添田公園の区域と配置

近世以降の添田本町地区は、南から北へと貫く日田道が小倉から天領日田を結んだことにより、英彦山参詣路としての役目を果たす日田道の要衝として繁栄した。慶長7（1602）年、細川忠興は小倉入りしてから領内の検地を行い、「手永」制という行政制度を導入した。手永は、小倉藩の統括支配の制度の一つで、田川郡には6手永を配置し、その一つを添田に設けた。添田本町地区は添田手永の中心をなした場所である。

小倉藩は、企救と田川、京都、仲津、築城の5郡と上毛郡の一部を領域としており、各郡を統括支配するために郡代という役を設けた。この郡代は、家老に次ぐ重職であったと言われている。この郡代の下には各郡を統轄する奉行が置かれ、これを筋奉行と称した。筋奉行の管理する各郡内は、だいたい6～7千石、村数にして15～25村を単位として1人の大庄屋を置き、この大庄屋が管轄する地域内を手永と称した。田川郡には、糠、上野、金田、伊田、猪膝、添田の6つの手永がおかれていた。

添田手永は、元松や副田、柿原、白土、成光（現、大任町）、落合、桝田、野田、添田、庄、新城、真木、岩瀬、伊原、津野（現、添田町）の各村を管轄し、これら各村には庄屋が置かれた。



昭和30（1955）年頃の中島家住宅周辺

手永の中心で大庄屋が居していた添田本町地区は、日田道を中心として道を横切る2筋の川により地名が分かれており、今日もその地名が地域住民の間で使われている。『郷土史誌そえだ第12号』によると、通称の地名は、添田の日田道の北側を流れる清水川、南側を流れる不動川により3つに区分される。不動川より南側を上町、不動川と清水川の間を下町、清水側の北側を下の原と通称で呼んでいた。

添田手永の中心地であった添田本町地区上町・下町には、商家として重要文化財「中島家住宅」があり、その近くに、藩公御成のとき開かれたという通称「御成門」を残す大庄屋中村家には、今もなお貴重な歴史的資料が豊富に保持されている。また、町指定文化財「中村家住宅」や現在も商業を営んでいる醤油屋などの歴史的建造物が良好な市街地を形成している。また、不動川に架かる本町橋の背後にある岩石城大手門跡には「法光寺」が建てられた。

添田町の古い時代の商業は明らかではないが、添田手永として、また英彦山参詣の通路として、上町や下町の日田道沿いに人家が建ち並び、商家も生まれた。明治の中頃には、法光寺橋の上下に数軒の呉服店、油屋、質屋、材木店、宿屋、醤油店、雑貨店等の商家が建ち並んでいた。呉服など商品の仕入れは中津や小倉が主で、馬の背を借りて運搬していた。



図 添田本町地区周辺町割りと主要な歴史的建造物 『明治地租改正絵図』

中島家住宅は、小倉から英彦山に至る日田道の宿場町の一つである添田本町の下町に位置し、小字名は下町東側である。中島家は屋号を「和多屋」と称する商家で、江戸時代には^{はぜろう}蠟燭の製造で財を成し、名字帯刀を許された旧家である。明治初年から大正年頃までは酒造業を、その後は醤油醸造業を営んでいた。こうした来歴により屋敷内には酒蔵や醤油蔵と称する付属建物が残存し、主屋と併せて重要文化財に指定されているが、これらの建物は19世紀前半の建築とされる主屋よりもやや古いと考えられているので、本来は蠟燭の製造など別の用途に用いられたものと考えられる。



中島家住宅（重要文化財）

一方、主屋は平入の一部を2階建とする建物で、妻入の町家が多い宿場町の中では屋敷の間口も広く、また建物も上質で際立つ存在である。室内は六間取りの母屋に下屋による拡張部の空間が付属する形態であるが、この6間取りの形式は近隣の農家建築に見られるもので、町家でありながら農家の間取りの影響を受けている。更に土間寄りの4室部分は根太天井として2階が設けられているが、奥側の座敷、仏間となる空間には2階は設けられていない。外観において棟落ちしている平屋部分がこの2室に該当する。この間取りがこの地域の商家の規範となっている。建屋全体は白漆喰の塗屋であるが、格子窓や下見板張りの腰壁、真壁造の土塀など、随所で木部を露わにした白黒のコントラストが強調される格式ある意匠が美しい。また、屋敷の奥には広大な庭園が広がり、岩石山を借景した作庭に圧倒される。

中村家住宅は、重要文化財中島家住宅から南側の添田本町地区上町に位置し、小字名は上町東側である。近隣には細川忠興が寄進した総檜造の山門が建つ古刹法光寺や添田手永中村家の御成門、旧添田銀行の古式建造物が立ち並ぶ。中村家は屋号を「新屋（あたらしや）」と称し、古来酒造業を営んでいたといわれるが、明治44（1911）年に「ニダイマス」の商標を得て、醤油製造業に専念した。同年11月天皇の福岡巡幸に際し、醤油1樽を献上し、その後、数々の品評会で優秀賞を受賞、昭和3（1928）年第11回全国酒類醤油品評会で1等優秀賞を受賞するなど評価も高く、後継者がなく平成10（1998）年に廃業するまで、近隣より多くの人が買い求めてきた。建物は明治末に火災によって失ったが、大正初期に再建した。店舗棟は外観漆喰塗りの土蔵造で総2階建、土間みせ、通り庭が店舗棟の半分以上を占める。正面の大戸口を入ると、土間には裏口まで2列の御影石の棹石が並べられ、荷車の軌道が設けられている。2階には表に面して重厚な納戸がある。店舗棟の北側に前室、玄関の間、仏間と続き、格調高い書院のある座敷へと繋がる。店舗棟と座敷棟の間に1坪ほどの坪庭があり、その背後に4畳半の茶室が備わり、裕福で格式ある商家であったことが窺える。不動川の東側に醸造棟、倉庫など古来からの醸造所があり、醤油樽や醤油溜り、絞り器等の醸造具が当時のまま残され、醸造の盛んであった添田本町地区の風情をよく伝えている。



中村家住宅（町指定文化財）

添田銀行は明治 34（1901）年 1 月 2 日に添田町日田道に開業し、後に法光寺前に移転した。添田銀行は、昭和 2（1927）年からの金融恐慌も乗り切ったが、昭和 7（1932）年に解散に至った。その後、民家として使用され今日に至っている。1 階部分は改修されているものの、2 階外観は当時のまま保存されており、大正期の風情をよく止めている。寄棟瓦葺、2 階建の洋館で、町家建築が多い本町通りの町並みの中で、独特の雰囲気を出している。大正時代、添田本町地区には添田銀行を始め、田川銀行、吉井銀行などの地場銀行があり、この地域の発展ぶりがよくわかる。



旧添田銀行

法光寺前の通りを挟んで、西側に大庄屋添田手永中村家の居宅がある。小倉藩主細川家が行政区画として導入した添田手永の中心として発達した添田本町地区の中核であり、添田本町地区に町家が集中し、独自の町割りが完成した。大庄屋自体の建物は改築してなくなっているが、通りに面して御成門が残されている。細川家後に小倉入りした小笠原家も手永制度を引き継ぎ、中村家は大庄屋として地域統括にあたり、藩主の鷹狩りや英彦山参詣の折度々開門した。改修されているものの江戸時代往時の風格を残す門塀が通りを引き締めている。



御成門

法光寺は、浄祐（天然上人）の開基と伝えられている。天然は本願寺第八世の蓮如上人に師事し、豊前豊後の地に浄土真宗の教えを広め、九州に浄土真宗を広めた最初とされる。

文明元（1469）年京都で浄土宗を学び上人の位を得て、同 6（1474）年豊前柳ヶ浦（北九州市門司区）に法光寺を創立した。同 16（1484）年蓮如の弟子順誓を得て、翌年蓮如真筆の額を掲げた。

順誓が法光寺二世となり、京都郡荒津井上名に寺を移し、文禄元（1593）年田川弓削田村で教えを広め、慶長 4（1599）年に添田野田口の新町副田峯高屋敷に移った。その後、慶長年中に岩石城大手門跡に寺地を拝領し、山号「寂静山」を頂いた。総本瓦葺の本堂は明治年中に焼失し再建されたが、消失をまぬがれた総檜造の山門には細川家拝領の九曜紋臺股が今も掲げられる。小倉藩主細川家が大庄屋と寺門を対峙して配置し、日田道沿いの町割りを創出したことがわかる。



法光寺

宮崎家は、上町西側に位置し、中村家住宅に対面する。地元では「御隠居」と称せられ、白山神社の宮柱家である。宮柱とは、神社を守り継いでいく柱元という意味で、寛永 21（1641）年の遷宮、宝永 6（1709）年の本殿建立、文化 11（1814）年の拝殿改修、昭和 6（1931）年の鳥居建立、これらの全てに施主として名が残されている。また、10 月中旬に行われている白山神社権現講にも宮柱家として深く関わっている。



宮崎家住宅

宮崎家住宅は明治期の本瓦葺の建物で、添田本町地区の規範となった重要文化財である中島家住宅の意匠をよく留めている。土間から仏間座敷へと 3 間続き、その右手に書院がある。組子欄間、簀子障子など当時のままの意匠も美しい。縁が廻る 2 階も重厚で、荘厳な風格を醸している。

添田本町地区の神幸祭の由来については、添田町編『岩石城』によると、古来、5 月中旬に上添田にある須佐神社の祇園祭として行われていたもので、文久元（1861）年の記録が西本町（町二区）で保存されている。かつて祇園祭りは、上添田組と町組が共同して祭礼を行い、白山宮から神輿が出て、御旅所に移り、翌日須佐神社に登り、白山宮に還御するものであった。

これについて、『郷土史誌そえだ第 3 号』によると、時代と共に白山権現社から須佐神社等を勧請し、年々祭りが大きくなり、また村人達を動員した祇園祭となり、近郷近在では稀にみる一大行事となったとされる。江戸時代には、小倉藩主小笠原公も代々上添田祇園祭に勅使代参を立てていて、山鉦の最上段横幕に、小笠原公の三階菱の家紋が施されている。祇園祭の行事は、5 月 14 日の初日がお下りで、翌 15 日にお上りがあった。14 日は発輦神事で神輿に神移しが済むと神輿方にお神酒が振舞われ、お下り行事となる。神輿方は担ぎ手 8 名と付添 2 名で、白丁に烏帽子姿に白足袋、ワラジ履でこれを担いだ。神輿が出立するとそれに続いて山鉦が巡幸した。



添田本町地区を通る神輿の様子
（昭和 30（1955）年頃）



添田本町地区を通る山車の様子
（昭和 30（1955）年頃）

白山神社は『白山神社縁起』によると昔、新羅国曾褒里から3神が岩石山にやって来て、岩石山に草木が生えるようにした。その後、吾勝尊（天忍骨尊）が天降ったという。保元3（1158）年に平清盛の家臣の大庭景親が岩石城を築城した折、豊比咩神社と曾褒里宮を合わせて白山明神を興して岩石山西麓に白山権現社を移した。その後宮崎家が代々宮柱家として造営してきた。記録には「葛城白山宮御遷宮 寛永二十一（1644）甲申三月 山下 御遷宮奉仕 … 添田町 宮崎五郎衛門」、「奉建立白山宮 宝永六（1709）歳乙丑十月二十一日 … 施主 宮崎五郎兵衛」「白山宮拝殿再建 文化十一（1814）年甲戌卯月四日 … 宮柱 宮崎彌兵衛」と有り、白山宮と深い縁が認められる。現在は添田神社の北側に隣接しているが、元は西側の台地上にあり、昭和54（1979）年に移築された。



白山神社

須佐神社は出雲国の須佐神社を本地に勧請したことに由来する。『添田町史』によると、延宝3（1675）年流行病により村民に多くの死者が出たため、祇園社を勧請して神殿を建立し平癒を祈願したと伝えている。現行建物は、大正10（1921）年に改築されている。須佐神社は「祇園さん」と親しまれ、豊前では、行橋市の今井祇園神社が最も古く、今井祇園神社を中心に各地に祇園社が勧請され、祇園祭が行われている。



須佐神社

神幸祭は毎年当番役に受け継がれ、神輿台帳、山鉦台帳に記録され、明年の当番の組に申し送っている。

神幸祭は、まず最初5月10日に注連下し行事があり、山元に当たった組中の男衆は注連下し行事を行い、女衆は全員で直会の準備をした。

山車の飾り花のバレンは、花切と称して、各家庭で花形に切った和紙を色染めする。それを長さ5m程の割竹に色紙を巻きつけ、桜花の切花を付け500本余作り、稲穂に見立てて、山車の四方に垂らす。今は公民館で仕立てている。



公民館で行われるバレン作り

山笠はお上り、お下りのある前日の夜、提灯山として町内を練り歩く。祇園山笠の名残と思われ、前祭りとして夜7時頃に公民館から出立する。

お上りの当日、早朝に当番役は行橋市長井浜まで神輿、山車の前祓いのため御潮井を汲みに行き、他の者は総掛かりで前夜の提灯を外し、花笠バレン、花飾り、刺繍入り横幕をつけ山笠に仕立てる。

以前は白山宮まで神輿を運んで神移しをしていたが、現在は神官が白山宮で神移しを行い、神輿が保管されている御旅所で発輦祭が行われる。午後1時頃から神輿のある御旅所で発輦神事を行い、神官、氏子、担ぎ役が御旅所からお練を始める。この後、2時頃から山車が安置されている公民館から出立する。



御旅所での神輿発輦神事



中島家住宅前を通る神輿行列

昭和初期の神幸祭は、須佐神社の地元の上添田の神輿が主軸となり、上町区の神輿に下町区の神輿がつづき、その次に上添田区の山鉦、上町区の山鉦、下町区の山鉦の順に巡幸した。

上添田区の神輿の先頭には赤旗10本が進み、神輿元が袴姿で白幣を持って進む。その次に、宮司、奏楽が道囃子を演奏しつつ進み、紋付羽織と袴姿の区長、神社総代や有志が続いた。道路狭しと練り歩き「ワッショ〜ワッショイ」のかけ声勇ましく行進する。これに続いて台持ちが2名、その次に神社総代や有志が大勢、お供として続く。上町・下町両区の神輿が後に続いて行動する。その次に上添田区の来年の山元が、袴で金幣を持って進み、本年の山元が御潮井桶を持ち、前祓いとして子笹で左右に浄めの御潮井を振りつつ進む。

午後5時頃に御旅所に着き、供え物や張幕、献灯提灯等の飾り付けが済んで、宮司によりお通夜の祝詞奏上がある。これから夜市やお通夜が行われ、一般参詣の人出で御旅所広場は大混雑し、身動きも出来ないほど賑やかであった。



幟と鮮やかなバレンが映える山車行列



中島家住宅前の日田道を上る山車行列

山車行列は、町二行政区と町三行政区の2つの地区において行われており、祭りの内容や練り歩くルート等が異なる。添田本町地区の山車には先導役が山車の屋根に登って誘導し、山車には銅拍子役の子供が太鼓や鐘を鳴らしながら街を練り歩いている。

本町地区上町組である町二行政区の山車行列は土日でルートを変えて巡幸する。

1日目のお下りは、法光寺前の御旅所から出立し、日田道を上町方向に上り、一旦白山神社方向に向かう。不動川際まで行くと、ここで白山神社方向に参拝する。ここで折り返し県道に出て添田郵便局を経て、上添田地区方向へ向かい、途中白山神社へと向かう。上り坂前で折り返し再び郵便局から神輿お披露目のため添田駅、添田町役場、旧町場の大正町地区まで行く。ここで折り返し、郵便局前から旧道に入り、西本町を練る。下町堺道から日田道へと戻り、御旅所へと帰る。2日目のお上りは、ほぼ同じ行順を辿るが、上添田地区、添田駅、大正町地区は練らない。最後に御旅所には帰らず、公民館へと向かい、山車を片付け、その後直会がある。

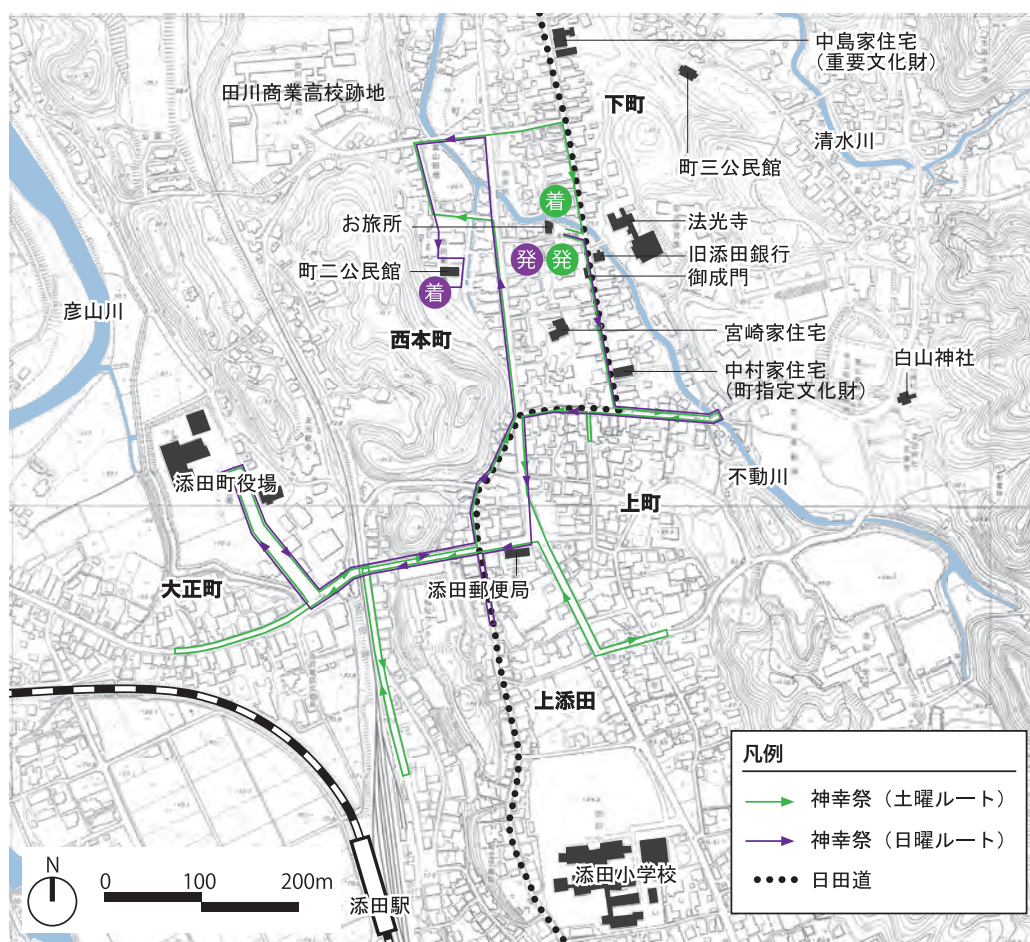


図 神幸祭ルート（町二行政区）

本町地区下町組である町三行政区の山車行列は、金曜の夜山・土曜・日曜でルートを変えて巡幸する。

金曜の夜山は神輿庫から出立し、岩瀬地区方向に向かい、村口堺まで行くと折り返し、県道まで出ると伊原地区方向に折れ、町四区行政区堺まで行き、そこから折り返して、下町地区を日田道の中島家住宅方向に上り、中島家住宅から白山神社方向に入り、急坂となる途中で折り返す。再び中島家住宅の交差点から御旅所まで行くと町堺道から商業高校跡地方向に向かい県道に戻って神輿庫へと帰る。お下りは、添田駅前広場で神輿のお披露目のため、添田駅まで行っている。

お上りは、夜山と同じであるが商業高校跡地を周回する行順を辿り、最後は中島家住宅から町三区公民館に着き、ここで直会座がある。

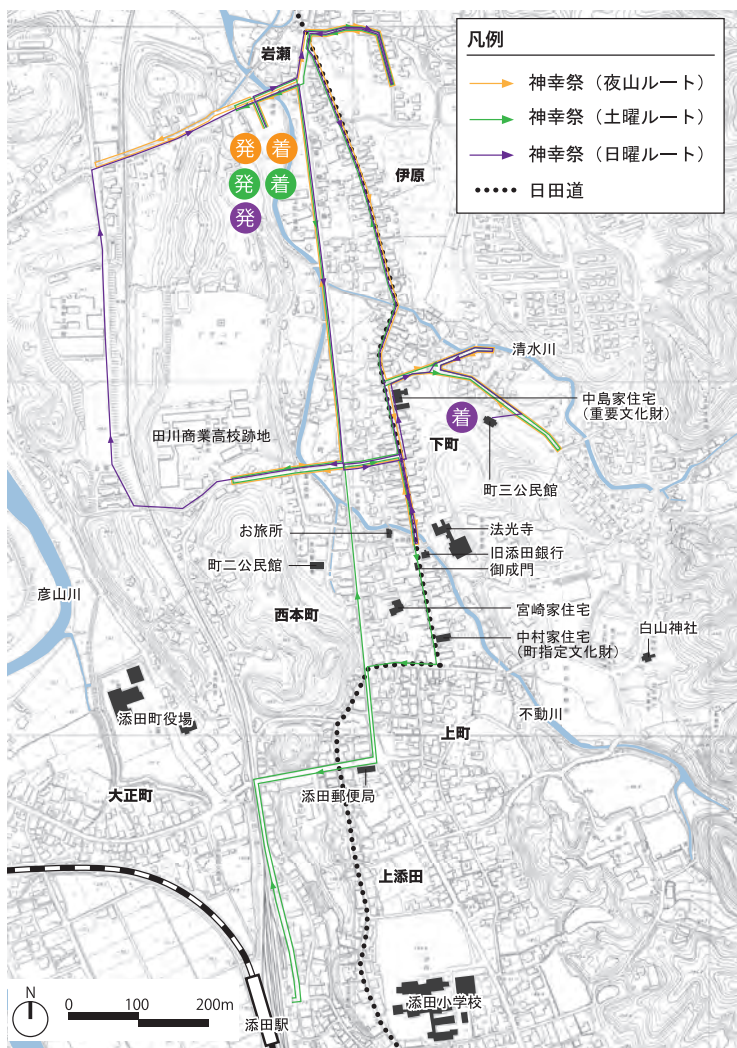


図 神幸祭ルート（町三行政区）



提灯山巡幸の様子



旧中村家住宅前を通る提灯山巡幸

祭りの最後、山車に飾られたバレンを人々がもらって帰り、屋根の上に投げ上げて家守りとしたり、玄関先にかけて、災い除けにする習わしが現在も継承されている。町中を歩くと、玄関先に飾られる色とりどりのバレンが祀られており、その様子から現在も信仰が保たれた独特の趣を感じ取ることができる。



玄関先に飾られるバレン

添田本町地区の神幸祭は、英彦山にまつわる神幸祭の流れと祇園祭の流れを汲む祭として、今は疫病退散や町内安全を祈願している。この神幸祭は、岩石城の城下町に端を発して整備された日田道沿いの町割りの上に、中島家住宅を中心とする町家建築が軒を連ねる中で老若男女関わらず参加する祭りで、稲穂に見立てた華やかなバレン飾りを靡かせて山車が巡幸する様は、白壁に映えて非常に美しい。往時の町家の人々の歓声や活気が蘇ってくるようであり、白山神社の権現信仰と相まって比類なき情緒が残されている。

コラム2 白山宮の権現祭

添田本町地区では法光寺前にあったゑびす様のゑびす祭、白山宮の権現祭、白山宮の秋大祭が行われていた。ゑびす祭は近年行われなくなり、秋大祭も権現祭と併せて行われるようになっている。

白山宮の権現祭は添田旧町部の祭りで現在の行政区単位では添田本町地区のある町一・町二・町三・町四行政区の氏子が参加して行われている。

旧暦11月第二午の前日に町一・町二・町三・町四の回り当番で宮座が行われていた。その時、宮柱宮崎家に保管されている3枚の「オト帳」という錦の垂幕を神殿に掛けなくては祭典が始まらず、供物や直会座の規律も厳しかったという。当场渡しという来年の当番への引継ぎには豆腐十丁を礼として差し出し、祭り帳と一緒に引渡していた。

この「オト帳」を保管している宮柱宮崎家は地域では「御隠居」と呼ばれ、記録では寛永年間から白山宮造営の時の施主を務めた。

「オト帳」は荘厳な花草竜紋の錦で出来ており、天保3(1832)年5月に寄進されている。このことから権現祭は江戸時代後期には既に行われていたものと思われる。

権現祭は現在、10月中旬の日曜に行われており、同様に町一・町二・町三・町四で回り当番で行われ、当番となった座元は白山宮宮柱に出立を促す。以前は「3回呼びに来るまで出立しない」といわれ、現御当主も若い頃早く出向くのを母親から窘められたという。ようやく、宮柱が神社へ出向き、「オト帳」が神殿に掛けられると、神主の祝詞奏上が始まる。参列者への修祓いの後、宮柱から玉串拝礼が始まる。祭典が終わると直会座が始まり、当番渡しが行われる。

権現祭りの後、後日組内では内座と呼ばれる権現祭の講が持たれ、今でも広く信仰されていることがわかる。

このように今でも厳しい規律で祭りが行われ、添田本町地区の秋の風情として権現祭が行われている。



宮柱宮崎家に伝わる「オト帳」



宮柱が神前にオト帳を掛ける様子



白山神社で行われる権現祭の様子

3. 英彦山水系流域と伝統芸能にみる歴史的風致

農耕の予祝祭として行われる神幸祭は、天水分の山「英彦山」から始まり、水の流れとともに下流地域に広がるように、時期をずらしながら各集落で神幸祭が行われる。この神幸祭においては、各集落において大切に守られてきた神社で様々な伝統芸能が奉納されている。自然と共生する農耕信仰を今も感じ取ることができる。

天水分の山「英彦山」は、彦山川や今川の水源地であり、水源地から流れ出る水は沢となり、いくつもの沢が合流することで川となり、最終的に彦山川や今川として、英彦山の麓の集落に流れ出ている。彦山川の水源地の一つは、奉幣殿の境内に祀られている天水分神にある。天水分神は、流水を疎通、分配することを司る神として祀られ、古くから人々に信仰されてきた。かつては、修験行者が入峰時に必ず水筒に入れ、峰中の保健飲用とお守りとして用いたとされ、近年は、不老長寿の御神水として頂く参詣者が多く、水源は岩の間より流れる「圓通の滝」より流れ出る霊水である。また、今川の水源地は、高住神社の獅子口にある。

これらの水源から流れ出てきた水は、彦山川として下流地域の落合や野田等の地域へ、今川として下流地域の津野へ流れ出でている。この水は水量が豊富であることから、古来より下流地域で営む農業用水として使われてきた。現在も英彦山の麓の集落においては、農業が営まれており、英彦山から流れ出ている水を使用することで、お米をはじめとして様々な野菜や花卉等の豊かな作物が作られている。

これらの集落は、地形的に平地が少ないことから、谷筋に流れる河川周辺にある少ない平地を農地として使い、地形が急勾配となる山林との境界に民家が建ち並ぶ空間構造の集落が多い。また、農地は地形に合わせて作られているため、段々の形状となり、棚田が多く見られる。

また、集落には様々な神社が立地しており、地域の守り神として、境内にある樹齢を重ねた樹木とともに地域の人々によって大切に守られてきている。これらの集落には、重要文化財に指定されている旧数山家住宅をはじめとして、往時の面影を残す茅葺屋根の住宅も残されている。これらの棚田と伝統家屋、神社、周囲の山林等が一体となることで、趣のある景観が現在も見られる。

天水分の山「英彦山」は、豊かな自然を擁しており、豊かな水量を持つ彦山川や今川等の河川が麓に流れ出でている。これらの河川は、農耕を営む人々にとっての生命の源であり、



圓通の滝からの御神水



高住神社の獅子口



農業景観（北坂本地区）

かつ水害を引き起こす脅威でもあった。こうした山に対する感謝の念と畏敬の念が山岳信仰を発生させ、文武天皇が雨乞いの勅願を発したこと等により「筑紫霊験所」として農耕における水分信仰の中心となった。

農耕の予祝祭として行われる神幸祭は、英彦山から始まり、水が低きに流れるように神幸祭も下流地域に広がっていく。この神幸祭は、水分信仰から英彦山神などに豊穰を祈る祭りとして行われ、山伏修験から影響を受けた神楽や獅子楽の伝統芸能が各所で奉納されてきた。今日も、本町の各集落で神楽や獅子楽が奉納されており、神楽は豊前地方だけでも30箇所以上で奉納されている。

春、英彦山水系の村々では春告げの祭として神幸祭が行われ、豊穰を祈るために神々と結ぶ神楽や獅子楽が奉納されてきた。山神への崇敬、畏敬を忘れず、英彦山水系の村々の若衆や子供たちの奉納する躍動みなぎる神楽や獅子楽は山里の特徴ある風情として地域に浸透している。山間に鳴る笛の音、太鼓の響きは山へと木霊し、山と里を結ぶ情景が今も続けられている。

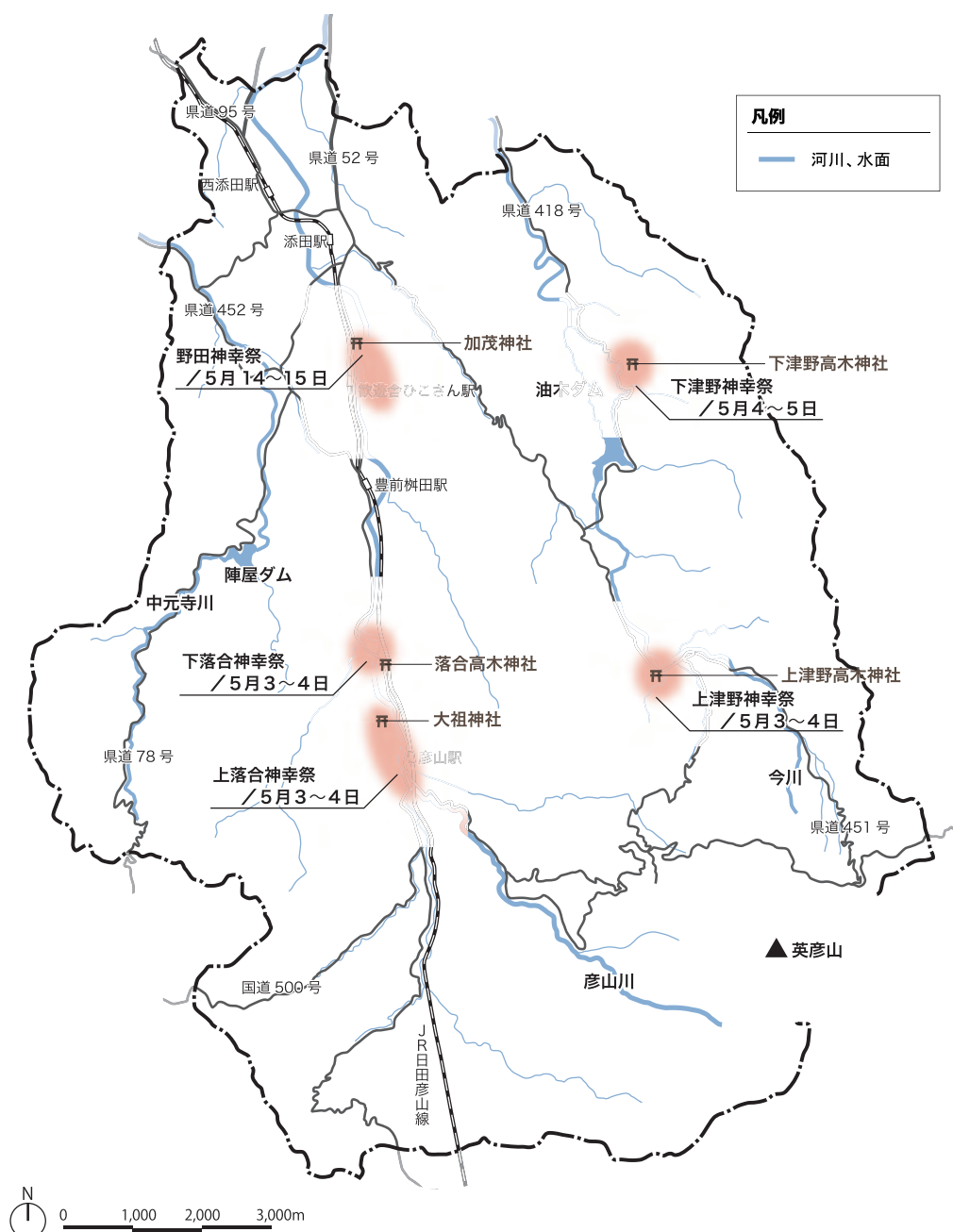


図 各集落で行われる神幸祭の神社と日時

* 日時は、平成 25 (2013) 年の日時を記載

3-1. 津野神楽にみる歴史的風致

津野神楽は、上津野と下津野に鎮座する高木神社において、毎年5月3～4日の二日間にわたって行われる神幸祭の際に、万念願を祈年して、奉納される伝統芸能である。

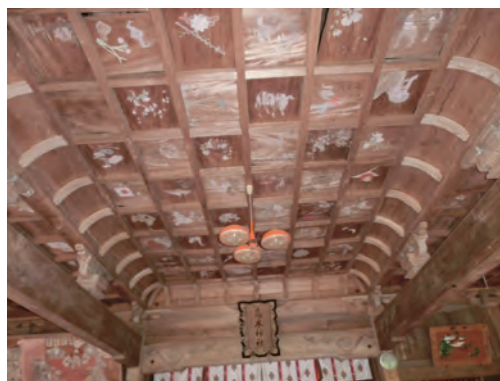
福岡県文化財調査研究委員会編『豊前神楽調査報告書』によると大正3(1914)年に創始したといい、それ以前はみやこ町伊良原や鐙畑から神楽を雇っていた。更に大正5(1916)年頃伊良原から移り住んだ加来松平が指導したという。その後、昭和16(1941)年みやこ町上高屋から養子に來た長末稔が指導して今日に至っている。以前は津野神幸の曳山とともに神楽が奉納されていたが、昭和40(1965)年の油木ダムの建設による人口減少により、神楽は一時期行われていなかったものの、郷土の芸能として残していこうと若い人達が奮起して、昭和46(1971)年に保存会が発足した。現在は、津野神楽保存会の人達によって行われ、10数名の座員をもって奉納されている。津野の神楽は、豊前一带に分布している岩戸神楽の系譜を引いている。

上津野高木神社の創建は、明治40(1907)年『津野高木神社明細帳訂正願』によると、弘仁5(814)年に彦山開基四世羅運上人が彦山七口の各所に四十八大行事の大願を創出したとされる。彦山七口については、『太宰管内志』に「上代、彦山に領じたり地には、其神社を建て限とす。是を七大行事ノ社と云。其今ものこれり。七大行事と云は、日田郡^{よあけ}夜開郷林村の大行事、又鶴河内村の大行事、筑前国上座郡福井村の大行事、同郡小石原村の大行事、豊前国田川郡添田村の大行事、下毛郡山国郷守実村の大行事などなり。此社今も有て神官是を守れり」と記されている。高皇産靈神の託宣により七ッ石下胎蔵界不動坂付近に大行事神を安置し、瀧宮大行事社とされた。また本社英彦山の御潮井採りの霊場となり、「津野口大行事社」として祀られている。『高木神社棟札』によると天保15(1844)年に小笠原右京太夫の寄進により造立したことが見え、その後改修が繰り返されてきたと思われる。

宝殿は桁行3間、入母屋造、銅板葺、向拝1間で麒麟妻飾、斗供など随所に江戸後期の彫刻が残る。拝殿は桁行5間半、梁間2間半、入母屋造、瓦葺、向拝1間、納戸付で内部には江戸時代後期の天井絵が残る。



上津野高木神社



上津野高木神社拝殿内部

下津野高木神社は、明治40(1907)年『津野高木神社明細帳訂正願』によると、英彦山四門のひとつ津野峠大行事殿として、弘仁13(822)年に彦山羅運上人が創立したとされる。宝徳(1449～1452)年中に、津野峠から正護山に移されたというが、『添田町史』によると、昭和40(1965)年の油木ダム建設に伴い、荒掘高台に移設された。

社殿は切妻造、瓦葺で、ダム建設に伴い新築された建物であるものの、移設以前の下津野高木神社の内陣が移築されている。御旅所(拝殿)は桁行4間、梁間2間、^{かえるまた}向拝1間で、社殿と同様に移設前の拝殿の部材が移築され、内部には大行事社の額や臺股、斗供、

天井絵、木鼻（象鼻）などの江戸時代後期の彫物が残されている。



下津野高木神社



下津野高木神社拝殿内部の天井絵

神楽の準備は神幸祭の2ヶ月ほど前から行われ、上津野高木神社では毎夜神楽の練習をする。また、しめ縄や御幣、神楽綱などの道具も座員によって準備される。

神楽の奉納は、津野地区の神幸祭において行われており、1日目の上津野高木神社から御旅所へのお下りの折に御旅所において、2日目の下津野高木神社から御旅所へのお下りの折に御旅所において奉納されている。

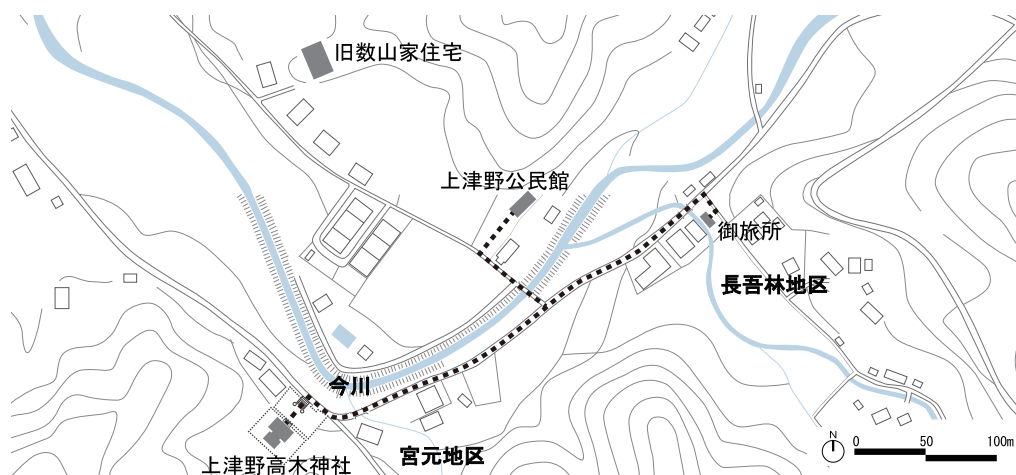


図 上津野神幸祭のルート

上津野高木神社では、御旅所の旅殿前の広場に斎庭を作り、その場所で奉納される。天候等の影響により、上津野高木神社の拝殿において奉納されることもある。

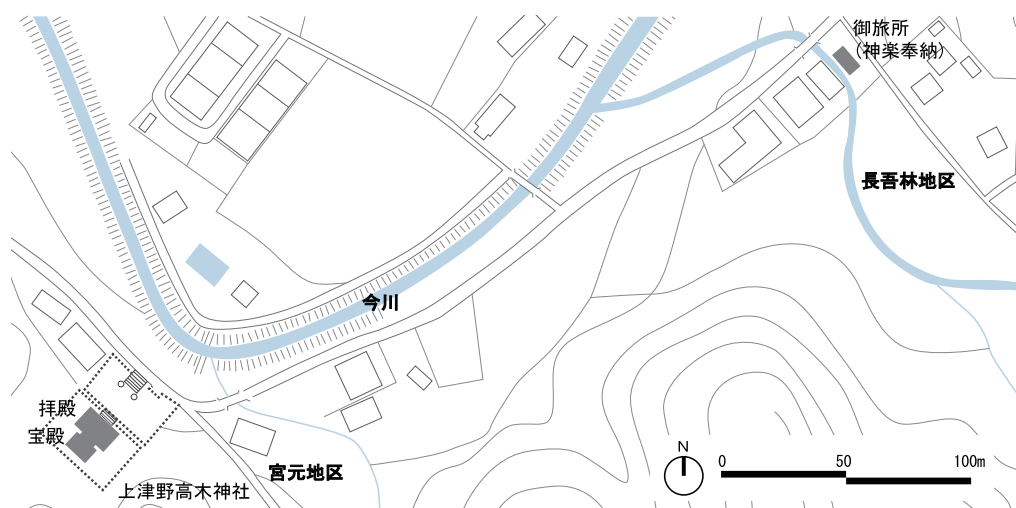


図 上津野高木神社境内、御旅所の配置

旅殿に安置された神輿の正面には、天岩戸の造形を置き、向かってその右手に楽人が座る。
楽器は笛・太鼓・銅拍子である。

午後8時神官の祭典の後、神楽方により大祓詩が奏上され神楽が始まる。

先ず、烏帽子に色とりどりの狩衣を纏った神楽方が神降ろしをする「米まき」、「折居」、「御福」を舞う。



米まき



折居

「メ切」では錦の狩衣を着けた幣役（法者）と鬼神が国土のやり取りをし、鬼神を追い出した国土に千早を着てシャグマ（毛頭）を着けた火神、水神、木神、金神の4神が四季を分け、土神と問答の上神の主に嗜まれる五行の舞の「地割り」を舞う。



メ切



地割り

四方神に豊穰を祈る「盆」の舞、再び鬼神と幣役が国土のやり取りをする「三の切り」、厄を切る「三本剣」の舞、綱持ちと神の主で鬼神を追い払う「綱御先」、邪を祓う「弓神楽」、浄めの「花神楽」が舞われる。



盆



綱御先

演目終盤に最高潮になると、思兼命おもいかねのみことが天岩戸を開ける算段をし、天鈿女命あめのうずめのみことが舞い、手力男命たじからおのみことが岩戸を開け、金幣（天照大神）を外に出す「岩戸」が行われる。夜神楽として12時過ぎまで舞われている。



岩戸（天鈿女命）



岩戸（岩戸開闢）

翌日の2日目、下津野高木神社では拝殿から御旅所まで神輿がお下りになると、輪番制によりきめられた4地区のうち1地区を練り歩く。その後、午後5時頃に神輿、子供神輿が還御すると、神前祭が行われ、7時頃から御旅所において昨日と同様の演目で神楽が奉納される。

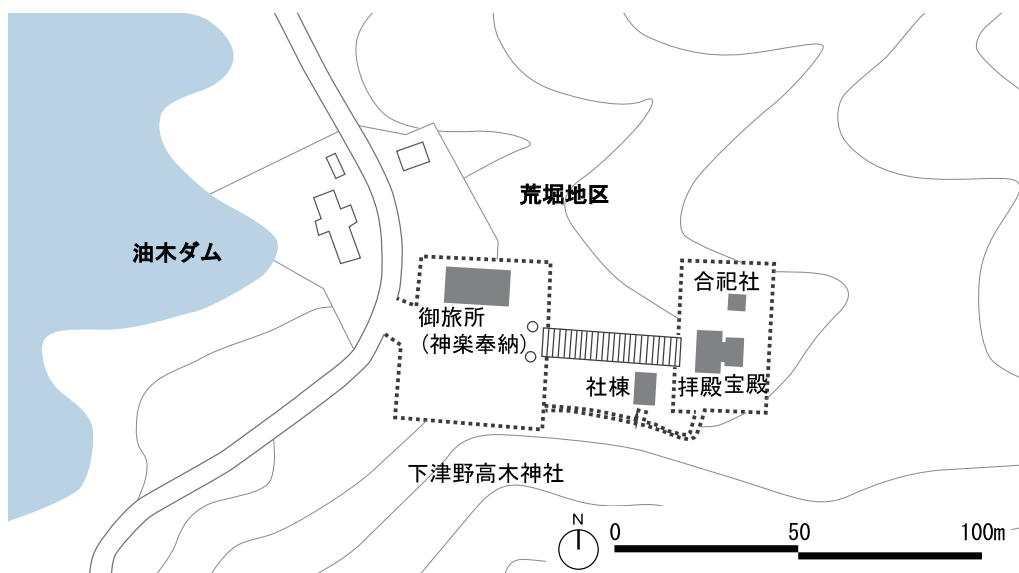


図 下津野高木神社境内、御旅所の配置

津野地区の神楽は、山を越え、人々の神々に対する崇敬と畏敬から伝授された芸能である。この神楽は、江戸時代より受け継がれる高木神社拝殿の内部で奉納され、色鮮やかな衣装や飾り付けとともに拝殿上部の天井絵と相まって、厳かな雰囲気の中にも華やかさが入り混じる。神楽の伝承者である故人の長末氏は、地元では「師匠」と呼ばれ、長末氏は神楽会員を「子供」と呼んでいた。時が流れた今もなお、「子供」達により伝承される神楽が息づいている。

3-2. 落合獅子楽にみる歴史的風致

落合獅子楽は、上落合に鎮座する太祖神社境内にある須佐神社と下落合に鎮座する高木神社境内にある須佐神社において、毎年5月上旬に行われる神幸祭の際に、豊穰と泰平を祈年して獅子舞と楽打ちが神社境内と御旅所で奉納されている。『郷土史誌そえだ』によると、太祖神社で奉納される獅子楽は、旧嘉穂郡筑穂町に鎮座する大分八幡宮で奉納されており、県指定無形民俗文化財となっている「大分の獅子舞」を伝授したとされている。この大分八幡宮の獅子舞は、京都石清水八幡宮より習得して享保9（1724）年に奉納したのが始まりで、筑豊地区各地の楽の源流とされている。本須佐神社の獅子舞もこの大分八幡宮より習得し、享保年間中（～1735）には成立したとされる。

一方、下落合高木神社で奉納される獅子楽は、『添田町史』によると、幕末の頃に現在の川崎町の木城から学んで現在に伝わっているとされ、木城も上落合獅子楽と同様に旧嘉穂郡筑穂町大分から学んだとされている。そのため、落合で奉納されている二つの獅子楽は、その源流において同じと考えられる。現在は、昭和50（1975）年頃に、高木神社獅子楽保存会が出来て、会長は公民館長が兼ねており、楽打ちと獅子舞にはそれぞれ、経験者が指導に当たっている。

神社記録によると、太祖神社の創建は寛永元（1642）年とされ、江戸時代は妙見社と称していたが、明治4（1871）年太祖神社と改称した。元禄17（1704）年に落合が上下に分村した時、英彦山三座（伊弉諾尊、伊弉冉尊、天忍穗耳尊）を勧請し、上落合村の産土神となった。11月下旬には江戸時代から続く酉祭りが宮座として行われている。

宝殿は石積高殿となっており、桁行10尺、梁間9尺、三間社流造、銅板葺、向拝4尺の建物である。両妻に下龍の妻飾などの江戸期彫物装飾が施されている。拝殿は桁行柱間8尺6間、梁間8尺2間、入母屋造、瓦葺、壁吹抜であり、宝殿と拝殿は2間規模の幣殿で繋いでいる。

脇殿の須佐神社にも拝殿には江戸時代の天井絵が残されている。



太祖神社



図 太祖神社境内の配置



太祖神社宝殿・幣殿

下落合高木神社は、英彦山四門の第一西口にあたり英彦山参詣の拠点であった。社伝によると、弘仁 13(822) 年に英彦山開基四世羅運上人が創建したと伝えられている。現行建物は拝殿・幣殿ともに昭和 26 (1951) 年に改修が行われている。宝殿は桁行 10 尺、梁間 8 尺、三間社流造、柿葺覆屋、向拝 4 尺の建物で、両妻に麒麟妻飾、虹梁にも臺股、木鼻などの江戸時代装飾が随所に施されている。拝殿は柱間 10 尺、桁行 3 間、梁間 3 間、入母屋造、瓦葺、吹抜の建物で、宝殿、拝殿は 2 間規模の幣殿で繋いでいる。英彦山の末社大行事社であり、11 月下旬に霜月祭りが宮座として行われている。



下落合高木神社

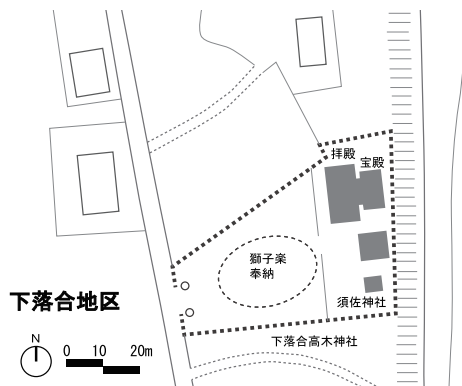


図 下落合高木神社境内の配置



高木神社妻飾りの意匠

上落合獅子楽は神輿発輦にあたり社殿の前庭で 1 回、御旅所に着座になって 2 回目の奉納を行う。この御幸に神輿と山車が同行し、氏子はその後に従いお供をする。翌日発輦神事後に 3 回目の獅子舞が奉納され、神輿還御の折、最後の獅子楽を奉納して神幸祭は終了する。



お上り御旅所発輦前の楽打ち



お上り御旅所発輦前に舞われる獅子舞

獅子楽は、集落を 6 地区に分割し、その組が祭座元（山元）として、毎年輪番で氏子青年が獅子舞、子供が大太鼓叩きを、奏曲の篠竹笛にあわせて舞う。演舞は、神社での祭典の後、神輿に神移しが終わってから始まる。まず、男女の 10 数人の小学生が社殿に向かって 2 列に並ぶ。その衣装は、白衣に小倉藩主小笠原氏三階菱の家紋が入った黒の胸当てをつけ、頭にはシャグマに黒の刺しゅうが入った鉢巻きを巻き、黒の手甲を着ける。下は黒の脚絆を履く。青か赤のたすきをして、背中には、黄・赤・緑・白の御幣を掲げる。

獅子楽は子供らの楽打ちから始まる。2 列の前に 1 個ずつ太鼓が置いてあり、先頭の者が

太鼓を叩き、後ろの者は、先頭の者にあわせて太鼓を打つ所作をする。先頭は左の太鼓に移動し、後の楽者が叩き始め、順次変わりながら楽を打つ。各人が持っているバチの持ち手に房がついていて、これは成就の秋の彼岸花を表わし、頭のシャグマ（毛頭）はススキを表す。最初、頭上で2本のバチを交差させ、それをふり下ろす。その所作は、笛・小太鼓にあわせて行われる。

一方、獅子舞は、集落の青年によって舞われ、10人ばかりの獅子方がいる。その衣装は、白の着物に、紺色唐草模様の衣装をはいている。獅子は、雌雄一対で、雌獅子が紺色布の胴で、雄獅子が茶色布の胴である。

獅子舞の演技は、太鼓打ちが始まるとともに舞い始め、三番まである。舞う場所は、太鼓打ちをする子供たちの後ろである。一番はイリ、二番はナカ、三番をノリという。イリは、赤い獅子舞の雄獅子を左にして二頭が並び、頭を左右にふって舞い始め、向かい合ったり並んだりして、ナカになり獅子方が交代する。続けて舞うが、このときゴザを敷いて雌獅子がしゃがみ、雄獅子が近づきお互い頭をまわしながら愛情の表現をする。ノリはイリのように舞うが、しゃがんだり、向かいあったり動きが激しくなり、最初並んだように雄獅子を左にして終わる。すべての所要時間は約10分である。

この獅子舞は、人の愛情をあらわしているものであり、イリは男女が会うところ、ナカは両者が親密になったところ、ノリは子供をつくって人々が繁栄することを意味しているという。

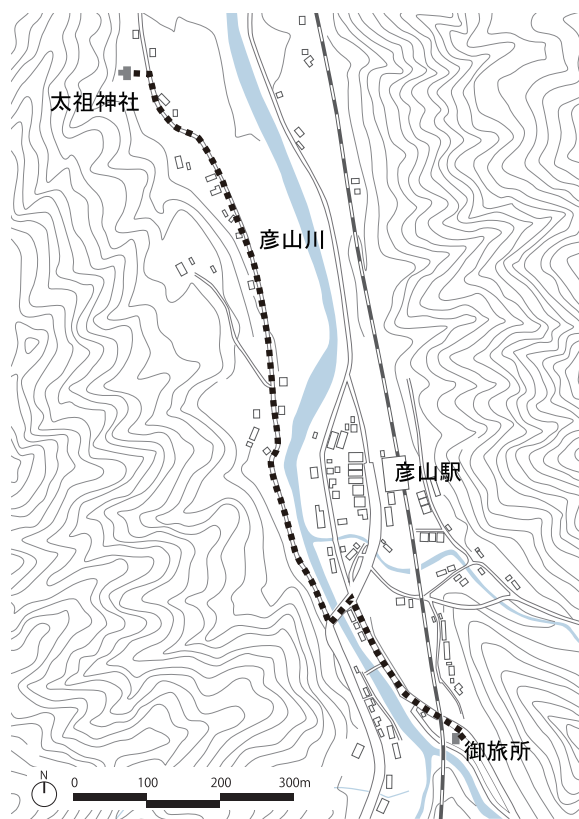


図 上落合の神幸祭のルート



太祖神社で奉納される太鼓打ち



お上り 太祖神社で奉納される獅子舞

下落合獅子楽も同様に神輿発輦にあたり社殿の前庭で1回、御旅所に着座になって2回目の奉納を行う。翌日発輦神事後に3回目の獅子舞が奉納され、神輿還御の折、最後の獅子楽を奉納して神幸祭は終了する。この祭りを運営する祇園組は、下落合氏子を地区別に5組に分け、その年の当番を山元という。山元がのぼり立てから神社の清掃までを引き受ける。次年の山元を受け取りといい、祭りの片付ける。



お上り御旅所での発輦神事

獅子楽は6名の楽打ちと獅子舞が平行して行われる。楽打ちの衣装は、白装束に着物を着て、五三の桐の紋をつけた黒の胸当てをつけ、頭には鉢巻きをしてシャグマを被る。下は青裁着袴に白足袋、黄色い布のたすきをかけて御幣を背中にさげる。獅子舞は、雌獅子は黒色の頭に紺色系布の胴をつけ、雄獅子は赤色の頭に同色系系統の布の胴をつける。中にそれぞれ2人ずつ入り、獅子方の衣装は雌雄とも同じである。

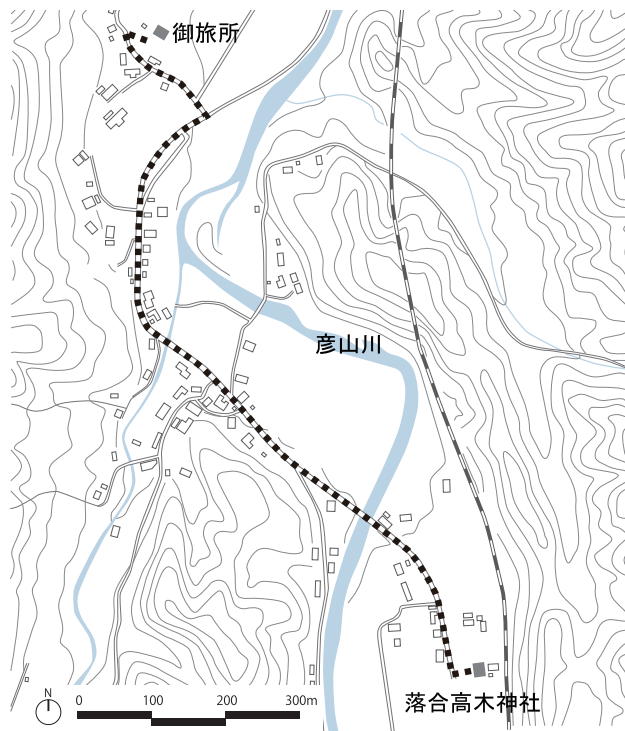


図 下落合の神幸祭のルート



お上り高木神社での着座神事



お上り高木神社で奉納される楽打ち

獅子楽は、発輦神事が終わって御神体が神輿に移されてから始まる。楽打ちは6人が2列に並び、先頭の者が房のついたバチを頭の上で交差して太鼓をたたき、他の者も同様の所作をする。この所作を繰り返して続けるが、終わり近くになると6人そろって左右に動き飛びあがる。

獅子舞は、楽打ちの列の後ろに位置して舞う。演目はイリとノリの二段階で、舞いは、雄獅子を左にして始まり、演目がかわるときに獅子方は入れかわる。演舞の流れは、上落合と同じ系列といえる。



お上り高木神社での獅子舞



無病息災で行われる獅噛み

落合地区の伝統行事として、旧英彦山神領の高木神社や太祖神社を中心に神々に豊穰と泰平を祈願する獅子楽は毎年奉納されている。神社境内において奉納される子供楽打ちと獅子舞の獅子楽が始まると、三々五々連れ立って多くの人が参集する。普段は静かな山麓農村に、子供たちの楽打ちによる威勢の良い太鼓や笛の音がよく響き、若衆が舞う荒々しい獅子舞への歓声が上がり、静寂を掻き消してゆく。山郷の鎮守の森に鎮座する太祖神社や高木神社の神々に里人たちが楽の音に情念を込めて祈りを捧げる情景が見られる。

3-3. 野田獅子楽にみる歴史的風致

野田獅子楽は野田の鎮守加茂神社において、毎年5月中旬の二日間にわたって行われる神幸祭の際に五穀豊穡を祈願し、神徳を感謝し、神霊を奉る氏子の奉仕である。

『添田町史』によると、光格天皇の文化元(1804)年に日向の国から伝来した獅子楽であるとされる。加茂神社は、古来日向の宮と神縁浅からぬものであり、同宮から舞楽の師を招いて習得し、相伝えて今日に至るとされる。この起源の記録については、幕末期に野田にあった小倉藩火薬庫の爆発の際に、村内大火災で焼失したとのことであり、記録は残されていない。しかし、田川市猪膝にも同型の獅子楽があり、野田に伝えたと言われており、野田の古老達も猪膝からのものと伝え聞いているとされる。

また、『加茂神社記録』には明治期からの獅子楽の指導者名が記されており、明治期(森本九平、森永長九郎、堀洋平、出口喜平、中村庄四郎、森山熊太郎、森本常平)、大正期(森本準一郎、中富吉蔵、山本勝治、中村平次、広沢牛郎、新野豊治)、昭和期(藤本愛次郎、崎山東一郎、北屋敷武則、白石嘉亀、中村潔、原和久、八島豊彦、高辻亀彦)と代々奏楽、獅子舞が大切に伝えられてきたことが分かる。これにより、少なくとも明治期から獅子楽が行われていたことがわかる。

加茂神社の神幸祭は、加茂神社で神輿への神移しの儀式が行われた後に、1日目に神輿のお下り、2日目にお上りがある。お下りは、野田地内の見地の貴船神社と御旅所が一年交代で行っており、加茂神社を神輿が発輦すると鳥居から参道を通り加茂橋を渡って野田本村から見地へと下りである貴船神社に向かう。貴船神社へ向かう際は獅子が先導し、新馬場の舞を奉納し、神輿が着座する。御旅所に下る年は、鳥居から参道を通り堤防沿いを御旅所へと向かう。同様に御旅所に入る前に新馬場の舞が奉納され、神輿が着座する。

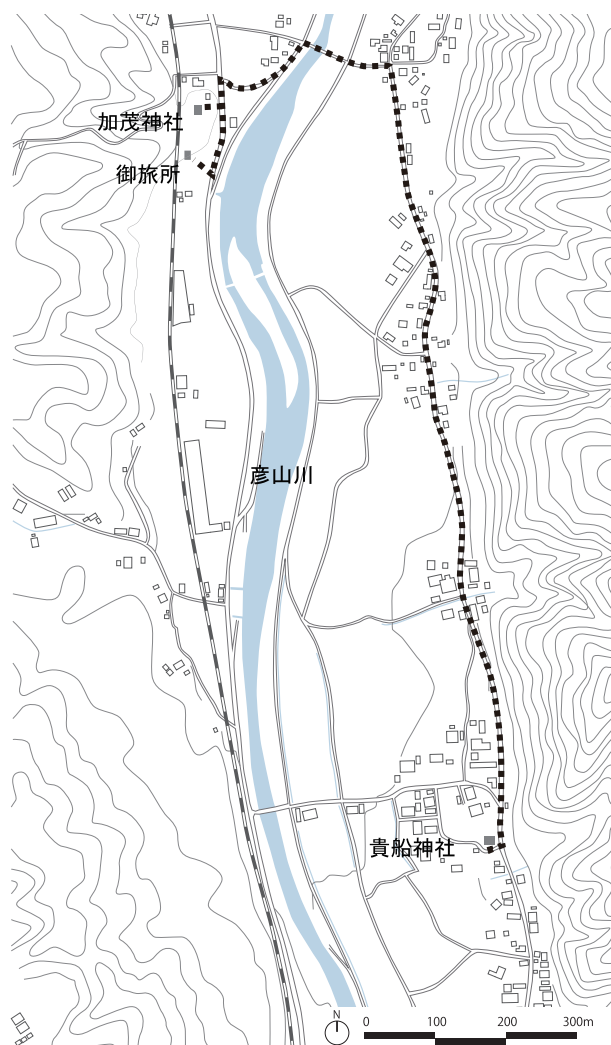


図 野田の神幸祭のルート

加茂神社は野田村の地主神をまつる神社として建立され、創建は景行天皇の御宇とされる。古来「光行社」とも称せられ、その文字が刻まれた石製扁額が残っている。現行建物は大正11(1922)年に改築された。宝殿は檜無垢一間社流造、銅板葺の建物で、木鼻、蛙股など随所に江戸期の造形が残る。この宝殿に併設して2間間口の幣殿がある。拝殿は桁行6間、梁間3間、入母屋造、銅板葺で、江戸後期の天井絵が施され、正面向拝にも獅子蛙股、麒麟木鼻など江戸期の彫刻が残る建築物である。



加茂神社

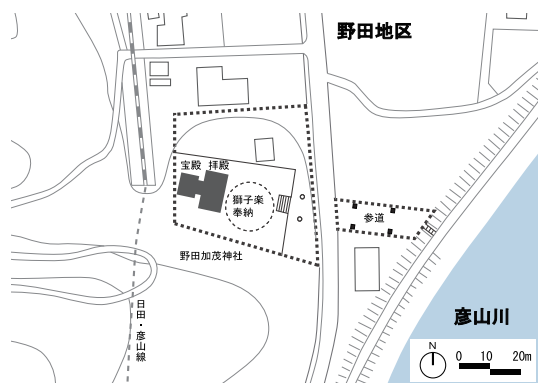


図 加茂神社境内

野田貴船神社は、加茂神社より先に祀られた野田本村の産土神で奈良時代の創建という。加茂神社から隔年で神輿のお下りが行われる。現行建物は桁行5間、梁間2間の瓦葺拝殿に右手2間奥のところに覆屋で守られた柱間4尺程の小振りな宝殿を配する。平成7(1995)年に改修されているものの、明治期頃のものと思われる木鼻など部材が各所に残っている。



野田貴船神社

獅子楽の練習は、神幸祭当日の1週間前に加茂神社にて4日間、貴船神社にて2日間、毎日午後7時から11時頃まで練習を行い、最終日は朝より加茂神社において総仕上げの練習を行っている。前日、獅子は楽宿に入り、楽宿で獅子楽役の接待座がある。当日は楽宿から獅子が出立し、楽宿前で獅子舞が奉納される。

獅子舞は、雌雄の一对で舞い、それぞれ頭と尾に1人をあて、合計4人で舞う。獅子の頭は、雄は赤、雌は黒塗りであり、現在使われている雌獅子頭は明治23(1890)年に氏子の前田為吉氏の寄進に係るものの作者は不明である。雄獅子頭も同時寄進のものと思われるが、中途破損して修復している。獅子の胴衣は、雄雌とも紺色の布を使い、獅子方の衣装も同じである。



獅子楽練習風景



楽宿に安置される獅子頭

お下りでは加茂神社で神輿遷座祭が行われた後に、獅子舞の演目である「^{ごだん}護壇」と「^{まえにわ}舞音和」の舞が行われる。護壇の舞は、神輿出発に当たり悪魔退散、道中安穩を祈念する舞のことである。その所作は、雄獅子を左にして2頭が横に並び、雄獅子を前に雌獅子が続いて時計の針とは逆方向に円形に回る。途中、2頭横に並んで正面に向かって舞ながら前進

する。その動きは激しい。次に雌獅子を先にして円形に進む。約3分ほどの演舞である。

舞音和の舞は、神慮を慰め奉る意味の舞のことで、最も代表的な舞である。雄雌一對の獅子が躍動感に満ちて荒れ狂う様を表現する勇壮な舞で、別名狂い獅子と呼ばれ、略してクリーとも呼ばれている。その所作は、2頭の獅子が並んで舞い始め、向かい合ったり並んだりしながら、後段では雌獅子がしゃがんだところに雄獅子が頭を近づけて回す所作もある。前・後段あわせて時間は5分程度である。



護壇の舞



舞音和の舞

加茂神社から神輿のお下りをして、神輿が貴船神社又は御旅所に入る際に、「新馬場」の舞が行われる。新馬場の舞は、神域の平穏や悪魔退散を祈念する舞のことである。その所作は、神輿の前方に雌獅子が並んで、頭を回しながらゆっくりとしたものである。



新馬場入りの舞

お上りでは御旅所から、加茂神社に入る際に、「馬場入り」の舞が行われる。馬場入りの舞は、還御に臨み神域安穏悪魔退散を祈念する舞である。その所作は、新馬場の舞と同様である。

お上りで神輿が加茂神社に着いて、祭典の後に、神輿から御神体の神移しが行われる際に、神庭において「神殿移し」の舞が行われる。その所作は、雌雄の獅子が並んで舞い、2回すりこむ。激しい所作はなく、時間は2分程度である。



馬場入りの舞（昭和50（1975）年）



神殿移しの舞

楽打ちは、氏子中の幼少年達が演ずるものである。その衣装は、緑色の模様が全体に入ったひざまでの長さで長袖の着物に、黒地に三階菱の紋が入った胸当てをつけ、黄色の帯で締める。この衣装について昔は、着物の生地や柄は自由で黒縹子に家紋を描いた胸当てをつけていたが、昭和50(1975)年頃からは獅子楽保存会で準備をしている。さらに頭には白色のシャグマを被り、手甲・脚絆に白足袋・草鞋ばきである。たすきは黄色で、背中に赤・白・紫などの幣下がりを着ける。バチをガクウチ棒とも呼び、長さは手の幅二つと言われ、赤色の房をつけている。

演舞の要領は、正面に大太鼓を一つ据え、子供が太鼓を叩くと、決まった所作を繰り返しながら、時計の針と逆方向に円形に進み、太鼓の所に帰ってくる。そこでまた、太鼓を叩き、前とは違った所作を繰り返して進む。その所作は12種類あり、小太鼓と笛、銅拍子が奏せられる。この所作は、稲作の種子まきから取入れまでの姿を表しており、バチはヒガンバナを、シャグマはススキの穂を示している。



加茂神社お上りでの楽打ち



楽打ち衣装
(昭和50年代(1975年～1984年))

野田獅子楽は五穀豊穡への神徳に感謝し、神霊の慰め奉るために舞われる。幼少年が楽を打ち、その音に合わせて、若衆が雌雄一対で躍動歓喜に満ちて荒れ狂う獅子を舞う。獅子が一晩を過ごす楽宿では門出を願って獅子楽が舞われる。山里に軽やかな笛の音が響くと、村人が加茂神社に集まり楽の子供たちに拍手を送る。楽を打つ子供たちの目は生き生きと輝き、村を担っていく新しい息吹が感じられる。

4. 彦山踊りにみる歴史的風致

彦山踊りの由来は、元弘3(1333)年に助有法親王が座主として下向した時に始められたと言われている。古くから先人達によって、踊り伝え語り伝えて今日まで継承されているものである。

『田川地方 民謡・童謡研究集』によると、昭和3(1928)年、炭坑節の撰者として知られる小野芳香は彦山踊りの譜面を収録しており、この頃には現在の彦山踊りの型ができていることが分かる。また、昭和10(1935)年頃の写真から、英彦山神宮銅鳥居の下にある勢溜や、旅館や土産物屋が立ち並ぶ前にある町溜で彦山踊りが踊られていることが分かる。昭和45(1970)年の『英彦山民俗資料緊急予備調査』によると、彦山踊りは江戸期～大正期までは主に盆会や祝祭事で踊られ、8月15日、16日頃を中心に、その前後に行われる各谷の祭礼でも踊られ、下谷弁天講、英彦山町大日講、西谷観音講と地藏講、上谷伽藍講などの座の終わりに踊られていた。



英彦山神宮銅鳥居の下にある勢溜での彦山踊りの様子(昭和10(1935)年頃)



旅館や土産物屋の前にある町溜での彦山踊りの様子(昭和10(1935)年頃)

起源については種々の説があるが、飛騨高山の吉左右踊りを起源とする説がある。江戸時代、飛騨代官長谷川忠崇が著した『飛州志』によれば、文禄年中豊臣秀吉が朝鮮出兵の折、飛騨国主の金森長近が肥前名護屋城に出陣し、国元へ戦勝の吉報が届く毎に城下の臣民が祝い踊ったといわれる。吉左右踊りにある「しんとろとろと眠る目の愛しさ とりおけ 芋桶」^{はせがわただか}「今宵も鹿の子 あすの夜も鹿の子 めしかえてござれ」という歌詞が彦山踊りにもあり、また衣装も菅笠を被るなど同じ意匠がみられる。また、彦山踊りは別名「松坂公卿踊り」^{まつざかくぎょうおど}とも呼ばれ、英彦山山麓では上落合地区の十日観音講など「松坂踊り」として盆会に踊られている。



飛騨高山の高山踊り(吉左右踊り)



上落合地区十日観音(8月10日)で踊られる松坂踊り

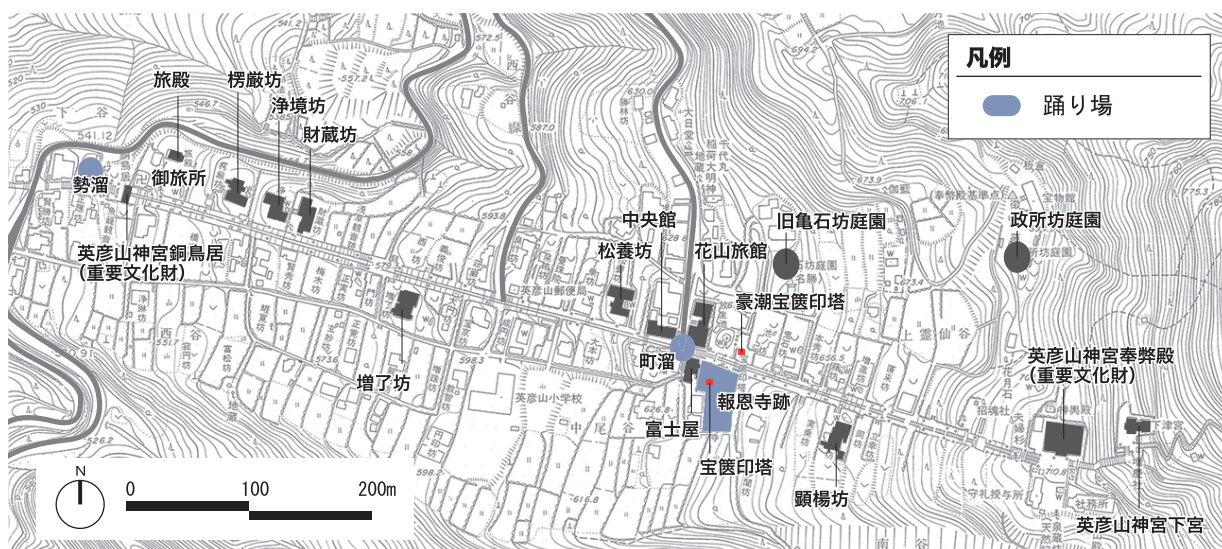


図 彦山踊りの位置

彦山踊りは報恩寺跡、勢溜、町溜を中心として踊られている。

報恩寺は英彦山の菩提寺で、得度山伏であっても葬儀は報恩寺導師によって執り行われた。よって報恩寺は英彦山の祖霊を祀る大切な場所であった。報恩寺前には祖霊を供養するために豪潮律師が建立した巨大な宝篋印塔と報恩寺境内地にも宝篋印塔1基が立っている。

報恩寺の創建は定かではないが、座主相有が正徳5（1715）年に編纂し、英彦山景勝地を詠んだ『彦山勝景詩集』には十二景の内に「報恩晩鐘」として夕暮れに響く報恩寺梵鐘の音が英彦山の情景に挙げられている。また、『明治初年坊中屋敷図』にも報恩寺として記されていることから、明治時代初期までは存続していたことが分かり、山伏の離山とともに廃絶に至った。



報恩寺跡

豪潮律師は中国密教と戒律等の伝授を受け、御霊の供養と飢饉救済を目的とした仏塔（宝篋印塔）の建立に努め、大小あわせて約八万四千の仏塔を建立したと伝えられる。英彦山報恩寺前に文化14(1817)年に建立した高さ8mのものが最大規模である。この宝塔は明治維新の廃仏毀釈の難に遭い、取り壊される間に塔身の宝篋印陀羅尼を表すシッチリア梵字を削り、豊後日田咸宜園に学んだ高僧平野五岳が「献燈」の文字を彫って灯籠に改変して、損壊の難を逃れた。



豪潮律師宝篋印塔



報恩寺跡宝篋印塔

報恩寺境内地にある宝篋印塔は、英彦山で唯一完全な形を残すもので、高さは3.5m余りで梵字なども完存するものである。台座には文化5(1808)年に嘉穂郡(現・飯塚市周辺)の有志が奉納したことが刻まれている。

勢溜は銅鳥居前の大広場で、かつて英彦山詣での群衆で賑わった場所である。石段の傍らには「下乗石」が立ち、ここで馬、駕籠を降り、身支度を正して鳥居を潜って参詣した。勢溜は彦山門口として重要であり、門前供養として古来より彦山踊りが踊られている。



勢溜



下乗石

富士屋旅館、花山旅館前の町溜は旅館や土産物屋が立ち並び、参詣者で最も賑わった場所で、神幸祭神輿休めの場所でもある。ここで行われる彦山踊りでは泊り客も参加して大きな輪をつくり賑わっている。



町溜



町溜での彦山踊り

町溜周辺の宿屋は、明治期に英彦山神社が官幣社となり、勅使が度々訪れるようになったことから富士屋旅館横の「御文庫」跡に勅使宿「天満屋」が建てられ、これを中心として宿屋が多く立ち並んだ。御文庫の名残として「板倉」があったが昭和42(1967)年に「政所坊」跡地である現在の地に移築された。板倉は元座主蔵で正面5.91m、側面4.95m、切妻造、本瓦葺、総板壁で、内部は2階構造である。希少な壁組木構造の建物であることから県指定文化財となっている。



板倉(県指定有形文化財)

参道筋の宿屋について『明治初年坊中屋敷図』を見ると、花山旅館の場所は、両替所である「油屋」があり、富士屋旅館は油屋の前の「地蔵堂」跡にあった。一方、富士屋旅館は油屋の前の「地蔵堂」跡に建てられている。花山旅館や富士屋旅館も山伏坊家から宿屋に転じた家柄である。花山旅館、富士屋旅館は町溜に面し、対峙して土産物店を構えている。双方とも客間は参道に面した2階にあり、店脇に泊客用の玄関がある造りである。炭鉱景気に湧いて筑豊・北九州などから多くの泊客があり、彦山踊りで賑わう昭和10（1935）年頃の写真により、昭和初期までには宿屋として営まれていたことがわかる。



花山旅館



富士屋旅館

現在の彦山踊りは、5月の英彦山山開き前夜祭や報恩寺跡で行われる8月14日の英彦山神宮の祖霊祭の後に踊られている。祖霊祭では午後8時に新盆の祖霊を祀る祭典の後、遠方より帰省した縁者や英彦山地区住民総出で彦山踊りが始まる。



祖霊祭



祖霊祭彦山踊り

彦山踊りでは神霊の依代とするため、踊りの中心となる場所に4本の笹竹を立て、しめ縄を張り巡らす。しめ縄には紙垂しでを下げて神籬ひもろぎを作る。その神籬の中に傘を立て笛・太鼓・三味線の鳴り物が音頭をとる。



広場の中心に神籬を作る様子



しめ縄に紙垂を付ける様子



笹竹を持って歌う口説き方



神籬の中で音頭をとる三味線方

口説き手は御幣の付いた2m余りの竹笹を持って歌う。口説き手が交代するときは、竹笹を渡して交代する。「ヨーイヤー、ヨーイヤー、ヨーイヤーサー」「一つや二つ エイコショ、ハ、ヨイトコソーラ、三つや四つなる幼子が父母恋し、サハーリャアリャア」と歌い出されると踊り手は右回りに踊りはじめる。踊り手の衣装が特徴的で着物を着て御幣の付いた菅笠を被っている。所作は幽玄緩やかであり、足の運びは摺足で能の「序の舞」八拍子に合うことから近江系の能楽などの影響が指摘されている。(昭和49(1974)年第14回全日本民謡指導者講習会)

踊りは緩やかであるので、前の人について踊ると子供でも踊ることができ、祖霊祭での彦山踊りでは二重三重の輪が広がる。

歌詞は72首もあり、かつては夜を通して踊られた。戒律の厳しい英彦山での生活では、この踊りが唯一の娯楽と考えられており、老若男女が老杉木立から洩れる月光を浴びながら、夜通し踊り明かしたと言われ、現在もその情景を偲ぶことができる。

2番以降の歌詞には「妹山背山中を流るる吉野川清姫恋し」、「鬼界ヶ島にいとし俊寛唯一人東恋し」、「石童丸は父を訪ねて高野山会わずに帰る」などがある。清姫は能「道成寺」、俊寛は謡曲「俊寛」、石童丸は謡曲「苅萱」を題材とする歌詞であり、他にも「大津」、「三井寺」、「清水寺」など京都、近江に関連する歌詞が多くあり、近江系能楽と言われる由縁とも合致している。また、全体的に七七調で後半7首は詩形が違って七五調にしている。これは、「カン音頭(かつては「男踊り」ともいわれた)」と呼ばれるものであり、調子を変えたり、踊り方も変え、踊りが乱れた時に引き締めを行っている。祖霊祭が終わると、幾つかの新盆の家に出向いて、踊りを踊っている。



現在の彦山踊りの様子(勢溜)



菅笠・着物の彦山踊りの衣装



新盆の彦山踊りの様子（町溜）



図 紫城筆 彦山踊り
（昭和 23（1948）年）

盆会の 8 月 14 日、この日ばかりは遠く山を離れた子や孫たちも帰省し、祖霊とともに山懷に抱かれる。月明かりに照らされた祖霊祭の行われる報恩寺跡境内には、久しぶりに子供たちのはしゃぐ声が響き、かつての賑わいが思い返される。町溜、勢溜では大きな輪をつくり、三味線や笛、太鼓の音頭、口説き手の声が闇夜に静かに溶け込み、菅笠姿の踊り手のしなやかな足運びは、深山にも「みやこ情緒」が感じられる。

5. 英彦山詣でと英彦山権現講にみる歴史的風致

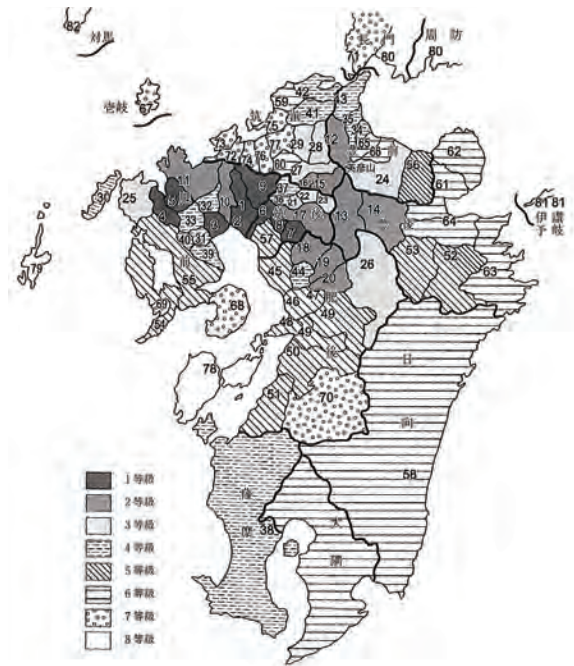
英彦山権現講とは、英彦山を信仰している人々が成した社会組織であり、彦山講や権現講などとも呼ばれている。この英彦山権現講は、毎年または数年に一度、代表者により英彦山を参詣することが習わしとなっている。昭和 54 (1979) 年発刊の『川副町史』(旧川副町は現・佐賀市)によると、江戸時代から「権現講」として英彦山に参詣していたことが記されている。また、「ヒコサンミヤーイに行く」と言って、3月15日の御田祭頃に参詣していたことが明治 35 (1902) 年の旧川副町堂面東組の『権現講帳簿』に見られる。英彦山の六助旅館(現・鷹巣高原ホテル)の『宿泊台帳』によると、現在も佐賀県神埼地域から「権現講」として継続的に英彦山を参詣していることが知られている。

英彦山権現講は、九州一円に広がっているため、様々な英彦山権現講が存在している。地域ごとの檀那数などから示された江戸時代の『檀方帳』によると、英彦山信仰が九州一円に広がっていることが分かるとともに、佐賀県や長崎県において信仰が強大であったことが示されている。

特に、英彦山信仰圏の等級差が第1等級であった佐賀県神埼地区では、現在も盛大に彦山権現講の祭りが行われている。佐賀県『千代田町誌』及び『神埼市史資料』によると、佐賀県千代田町大島地区では江戸中期から毎年2月第2日曜日にクリークに掛かる橋で、若衆 30 名余りが橋の双方に分かれて水をかけ合う「ミズカカイ」と呼ぶ「水かけ祭り」を行っている。この祭りの1ヶ月後の3月、「権現講」として代表者による英彦山詣が行われている。



佐賀県神埼市千代田町大島の権現講水かけ祭り



英彦山信仰圏(檀那場)の等級差

- | | | | | | |
|------|--------|--------|--------|-------|----------|
| 第1等級 | 1 上佐賀 | 2 佐賀城下 | 3 白石 | 4 有田 | 5 伊万里 |
| | 6 三潁 | 7 上妻 | 8 下妻 | 9 田代 | |
| 第2等級 | 10 小城 | 11 唐津 | 12 田川 | 13 日田 | 14 玖珠 |
| | 15 上座 | 16 下座 | 17 神代 | 18 山鹿 | 19 菊池 |
| | 20 合志 | 21 山本 | 22 竹野 | 23 生葉 | 24 下毛 |
| 第3等級 | 25 平戸 | 26 阿蘇 | 27 夜須 | 28 嘉麻 | 29 穂波 |
| 第4等級 | 30 平戸嶋 | 31 鹿島 | 32 多久 | 33 武雄 | 34 仲津 |
| | 35 京都 | 36 御井 | 37 御原 | 38 薩摩 | 39 塩田 |
| | 40 嬉野 | 41 鞍手 | 42 遠賀 | 43 企救 | 44 肥後山本 |
| 第5等級 | 45 玉名 | 46 飽田 | 47 託摩 | 48 宇土 | 49 上・下益城 |
| | 50 八代 | 51 芦北 | 52 大野 | 53 直入 | 54 深堀 |
| | 55 諫早 | 56 宇佐 | 57 旧柳河 | | |
| 第6等級 | 58 宮崎県 | 59 宗像 | 60 御笠 | 61 速見 | 62 国東 |
| | 63 海部 | 64 大分 | 65 築城 | 66 上毛 | |
| 第7等級 | 67 杵岐 | 68 嶋原 | 69 長崎 | 70 求麻 | 71 豊浦 |
| | 72 怡土 | 73 志摩 | 74 早良 | 75 糟屋 | 76 那珂 |
| | 77 藤田 | 78 天草 | 79 五島 | 80 防長 | 81 伊豫・讃岐 |
| 第8等級 | 82 対馬 | | | | |

図 英彦山信仰圏(檀那場)の等級差

【出典：長野覚『英彦山修験道の歴史地理学的研究』】



権現講の直会の様子
水かけ祭り

この大島地区から権現講代参に来る坊家は「正賢坊」で、御当主正木氏によると3月15日の御田祭、または4月の神幸祭の折に権現講として参詣していると言う。昔は宿坊に宿泊していたが、現在は坊に詣ると直ぐに英彦山神宮へと参詣し、その日の内に帰路につくという。



図 権現講の英彦山詣でに係る建造物

正賢坊は、銅鳥居より約200mほど下った地点の南側に位置し、英彦山門前西限にある。日田道～雲母坂～唐ヶ谷きららざかに入って次手坂を過ぎると正賢坊に出ていた。坊の建物としては小規模で外観は茅葺矩折れで客殿部分は2階建になっている。現在は、道路際から直接茶の間脇の玄関に入るが、当初は、客殿の下手から屋敷内に入り奥まで通って左に2回折れて式台前に着くようになっていた。

建立年代は、『英彦山伏の住む英彦山 英彦山伝統的建造物群保存地区調査報告書』によると、天保11(1840)年とも安政頃(1854～1860)とも伝えるが、見た目はもう少し新しく、慶応頃(1865～1868)とされる。他の宿坊に比べ祭壇の位置など異なるところが多く、小規模ながら珍しい例と言われている。建物は鍵屋造、茅葺鉄板被である。



正賢坊

また、坊家で昭和初期から「桜荘」を営んでいた了乗坊は、従来多くの権現講の泊まり客があったことが知られ、昭和19～21(1944～1946)年の『宿泊人名簿』には住所、氏名、年齢、職業、宿泊目的、前夜宿泊地、到着日時、出発日時と細かく記されている。戦時中であつたため、この表紙には「福岡県添田警察署」の印があり、中にも押印されていることから定期的に検閲を受けていたことがわかる。この宿泊帳をみると、昭和19(1944)年10月5日に佐賀県小城郡三日月村(現・小城市)、福岡県三潞郡、佐賀県神埼郡からの権現講と見られる3、4名の小規模3団体の宿泊客があり、これは英彦山秋大祭の日に当たる。また、終戦直後の昭和21(1946)年2月14日に福岡県朝倉郡夜須村(現・筑前町)からの16歳～24歳までの男子12名が宿泊している。この日は古来英彦山松会の日に当たり、16～18歳

の青年と、初参りの者により権現講の代参が行われたことがわかる。当日は午後7時に到着、翌日は午前8時に出立している。このような代参は、戦時中は一時中断されたが、戦後直ぐに権現講が復活した。



英彦山桜荘宿泊人名簿(昭和 19(1944)年 4 月 15 日～昭和 21(1946)年 3 月 30 日)

現在でも、『西日本新聞 2013 年 7 月 17 日版』によると、佐賀県小城市の農家集落からも毎年英彦山を参詣していることが示されている。小城市の農家集落では、講が行われており、毎年 30 軒近くある集落の中でくじ引きが行われ、当たった数軒が英彦山参詣に参加するという。現在の英彦山への参詣は、自動車で行われている。この参詣者の習わしとして、英彦山神宮銅鳥居で参拝した後に鷹巣高原ホテルに行き、お昼にコイやヤマメの魚料理などを食べた後、山頂に登って英彦山神宮中宮や英彦山神宮上宮を参拝することとなっている。鷹巣高原ホテルの経営者の祖先は、英彦山中腹にあった玉屋谷集落に住んでいた山伏「法輪坊」であり、時代の流れとともに宿坊からホテルへと形態が変わった。夜は、昆布やかまぼこ、タケノコ、鯛を使った伝統料理「おひら」を味わいながら宴会に興じる。支払いは、「宿泊代」ではなく、「包み銭」として相応の金を渡しており、往時のお布施の名残を留めている。この際、英彦山神宮のお札としゃもじを集落の戸数分、土産として渡し、日本酒 2 升と前日の夕食の残りをつめたお弁当を渡すという。



おひら

鷹巣高原ホテルは、参道筋の花山旅館の東側に隣接してあった六助旅館の別館として昭和 34(1959)年に建てられた。現在、英彦山地区で数少ない宿泊施設で、権現講の代参宿泊もここで行われている。



鷹巣高原ホテル

代参者は、銅鳥居から英彦山神宮境内を目指し、奉幣殿での参拝を済ませると、一路御本殿の上宮を目指す。途中、下宮、中宮、行者堂に参拝する。上宮参拝を済ませると、再び奉幣殿へと参拝し、そこで御札や英彦山がらを権現講社員のために授かって帰路につく。



佐賀県神崎市猪面地区の英彦山権現講の様子（平成 23（2011）年）

上座にいる 4 名が当年の施主で、英彦山に代参した報告と御神酒開きをかけて権現講が行われ、次年の施主決めのためのくじ引きも行われる。

英彦山神宮中宮は、英彦山中岳の中腹に鎮座する。祭神は宗像の三女神であり、豊前国宇佐島から遷座したとされる。安政 4（1856）年、鍋島閑叟が寄進した木造社殿があったが、平成 3（1991）年の台風 19 号の激甚的な災害により滅失し、現在は同所に中宮として石祠が建立されている。



英彦山神宮中宮

英彦山神宮上宮は、英彦山中岳の山頂に鎮座する英彦山神宮の御本宮である。祭神は天忍骨尊である。『英彦山神宮記録』によると、明徳 3（1392）年の回祿以来、数回の火災に遭って焼失し、現在の社殿は、天保 13（1842）年から弘化 2（1845）年の間に、佐賀藩主鍋島齊正の寄進に係るものとされる。標高約 1199m の山頂に鎮座している社殿のため、人力による建築材料の搬送や、雨量が多い状況下での木造建築の保存は容易でなかったと思われる。現在の建物は霧除けにより覆われている。宝殿は桁行 5 間、梁間 4 間、入母屋造、銅板瓦棒葺、向拝 3 間、総檜造の白無垢社殿で、御殿の板戸には鍋島家の抱茗荷家紋が掲げられ、木鼻、墓股などクス材の細密彫刻が施される。拝殿は桁行 5 間、梁間 4 間、入母屋造、銅板瓦棒葺、向拝 1 間で、神饌所付である。幣殿はなく、宝殿、拝殿の間は石畳となっている。二十数坪の小規模な建築物であるものの、英彦山を代表する社殿建築の一つといえる。



英彦山神宮上宮

かつては英彦山詣でのため、多くの参詣者は筑前、豊前、筑後から郡境・国境の峠を越え、英彦山に到達した。その経路は、門前から延びる津野七ツ石、雲母坂、日田道などの古道が九州自然歩道として整備され、現在では多くの登山者が訪れている。また、動線上には旧数山家住宅（重要文化財）、野田宮田家などの従来「草鞋替え」であった場所がある。



雲母坂

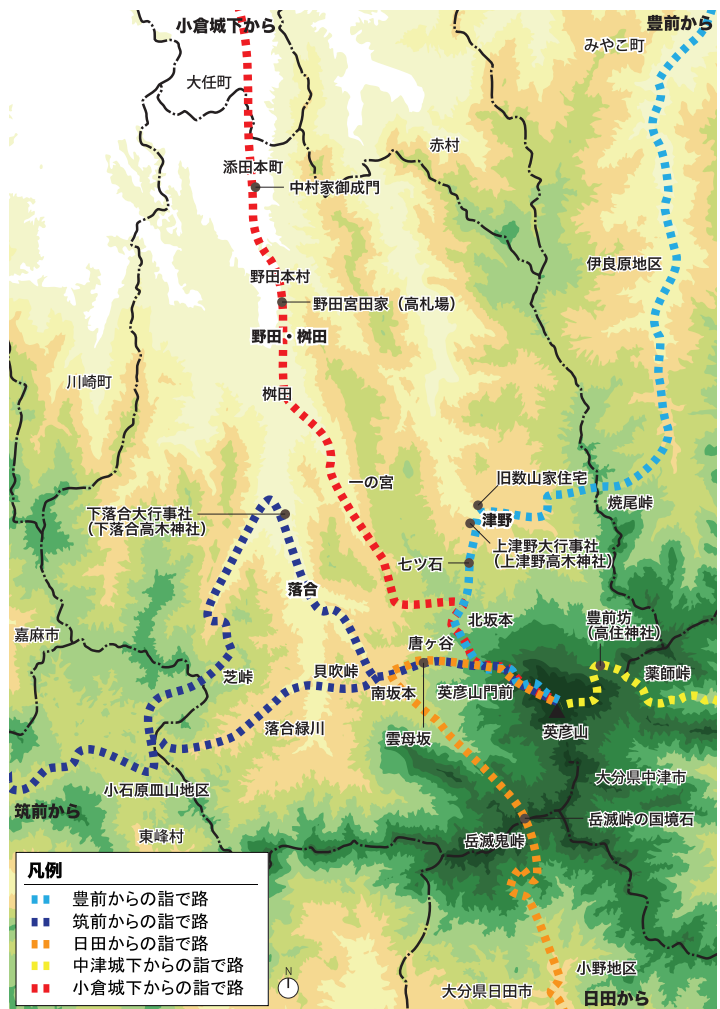


図 英彦山詣での参詣路

旧数山家住宅のある上津野宮元集落は、英彦山詣での最後の集落で、ここを過ぎ七ツ石を通して英彦山門前へと往来した。

旧数山家は、天保 13（1842）年に建築された直屋の好例で、桁行 10 間半、梁間 4 間の大振りな建物である。平入でほぼ中央部に入口があり、内部中央に土間を配し、東側に 3 室（広間、中之間、前座敷）が配置され、北寄りに 3 室（かつて、納戸、奥座敷）が配された、整形 6 間取りの形式である。納戸と奥座敷は壁で仕切られ、納戸は産所として



旧数山家住宅（重要文化財）

用いられた。前座敷と奥座敷は南北にならび、奥座敷に床の間が設けられ、前座敷の東側に仏間をおいている。囲炉裏は「かつて」と呼ばれる部屋の上り框に接して設けられている。

入口からすぐに広い土間で、奥のつき当たりが「すじばい」で、土間の西側に北から「みそべや」、「くら」、「まや」、「なや」がそれぞれ幅 1 間、奥行き 2 間でならび、「まや」と「なや」の部分は納戸としての機能を持つ中 2 階となっている。天井は奥座敷だけが棹縁天井で、他の部屋は全部竹天井で 3 種類に分けられる構造である。

今川上流の静かな田園風景の中に映える茅葺の大屋根が往時の賑わいを偲ばせている。

福岡県南部や佐賀県からの代参のほか、大分県日田地方でも毎年春に代参者を立て、英彦山神社の春の「御田祭」に参詣している。英彦山から帰路につくとき、参詣者は講中への土産として、神札や英彦山がらを授与所で求めて帰ることが習わしである。英彦山がらは、現在、参道沿いの土産でも求めることができる。権現講では、英彦山の特産品であったシャモジを買い求め、帰路それを打ち鳴らしながら帰ると、村内ではサカ迎えが行われた。また、上宮の熊笹を持ち帰り、整腸薬として煎じて飲んだり、牛馬の守りとして食べさせたという。

「英彦山詣で」は「半参宮」といわれ、2度参詣すれば「伊勢参り」したのと同じ御利益があるとされた。このような参詣は昭和前半までであったという。



熊笹を持ち帰る参詣者
(昭和31(1956)年)

現在の英彦山では3月15日の御田祭、4月第2土・日曜の神幸祭、5月下旬の英彦山山開きに多くの参詣者が有り、その時に権現講代参が行われている。



山開きでの上宮参詣の様子

英彦山権現講は、九州一円42万軒にも達し、「十方檀那」と称された信者が英彦山参りのために各村々で作った信仰組織のことで、毎年、九州の各地域にある英彦山権現講の代表者が参詣する「英彦山詣で」が脈々と受け継がれている。英彦山権現講の参詣は、英彦山参詣路を通して英彦山神宮を参拝するもので、時代の移ろいの中で参詣する様相は変化しているものの、英彦山を参詣する光景から英彦山信仰を感じ取ることができる。

コラム3 英彦山詣でと英彦山がらがら

■英彦山がらがらの製作

英彦山がらがらは、約 800 年の歴史を持つ土鈴のことで、お守りとして親しまれている物である。

英彦山がらがらの製作は、英彦山の麓に位置する緑や水が豊かな落合集落の窯元で現在も行われている。

その製作方法は、福岡県産のきめの細かい粘土を使って、粘土をくるくると丸め、丸めた粘土に切れ込みを入れて鈴口を作る。その中に鳴子となる粘土を素焼きした小さな玉を入れ、直径 2 cm 程度の土鈴の原型を作る。窯元ではこの行程を一つの土鈴につき十数秒で行い、昔は一日に 1,000 個以上を作ったが、現在は 600 個程を作っている。土鈴は乾燥後にまとまった数になると、薪釜で素焼きされる。この際、窯で焼く温度が高すぎると甲高い金属音のような音色になってしまうので、素焼きならではの素朴な音色になるよう調整される。その後、水を表す青色と太陽を表す赤色を鈴口に彩色し、稲わらで 5 個ずつ束ねて一つの英彦山がらがらが完成する。

製作のピークは、参詣者が多くなる年末年始から春を迎える前の、秋から 12 月頃にかけてで、多くの土鈴を製作し、英彦山神宮までの道のりを運んでいる。

英彦山がらがらの特徴は、一つ一つ時間をかけて手作りされているため、音色が一つ一つ異なり、趣が感じられるところにある。

■参詣者への英彦山がらがらの授与

製作された英彦山がらがらは、英彦山神宮でお祓いを受けた後、お守りとして授与所で参詣者に授与される。また、英彦山の参道の店舗でも英彦山がらがらを買求めることができる。

以前は、参詣者が英彦山がらがらを腰に下げて持ち帰るという光景が、小粋な英彦山情緒として親しまれていた。参道を下る際に揺れて「カラカラ」と奏でる、その温もりのある音色は、素焼きならではの素朴な音色で、英彦山での風物詩であった。今も「英彦山詣で」の記念として、多くの参詣者が持ち帰っている。



一つ一つ手作りの英彦山がらがら



英彦山がらがら



英彦山がらがらの窯元



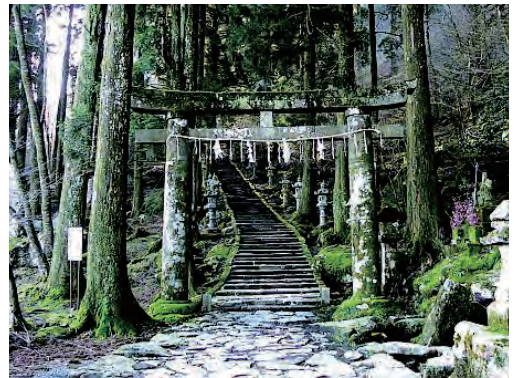
英彦山神宮で授与される英彦山がらがら

6. 高住神社にまつわる歴史的風致

英彦山では古来より春の松会、秋の豊前坊大祭が行われていた。春は霊仙寺境内で万物生成を予祝して松会を行い、秋には豊前坊で万物成就を祝って神幸祭を行っており、その後全ての神々に感謝し、採燈護摩供を行っている。

豊前坊は、時代の流れの中で高住神社と名を変えたが、今も英彦山信仰の東の玄関としてその役割を果たし、牛馬信仰の中心地として農村部から多くの参詣者を集めている。

高住神社は、旧称は豊前坊、竹台権現といい、江戸時代の『彦山記』には「豊前崛一に鷹栖の宮という、高天原の奥にあり、主神燐戔童子と称す大日靈貫尊の変身也、脇土火明命火返と云う、行者開峯の時出現也…」とあり、豊前豊後の国の守護神として鷹巣山に祀られ、遠く継体天皇の御代（1500年前頃）藤原恒雄の御神託によって豊前坊社が創建されたと伝えられている。この祭神は人々の病苦を救い、農業や牛馬・家内安全の神として古くから崇められてきた。また、九州の天狗の頭領「豊前坊天狗」の宮として、現在でも修験者たちの信仰を集めている。



高住神社（豊前坊）参道

高住神社の社は、修行の窟の岩屋に取り付いて建てられ、周辺にも逆鉾岩等に見られるような奇岩に富み、身のすくむような断崖絶壁である望雲台行場など、天狗の住処に相応しい景勝地がある。また、高住神社は、英彦山北岳（法躰岳、標高 1192m）の登山口に位置し、多くの参詣者が訪れている。



望雲台行場



逆鉾岩

豊前坊信仰は英彦山権現信仰と並び英彦山信仰の中核をなすもので、牛馬の守神として農村部に多くの信者を抱えていた。権現講で英彦山を参詣する時には、必ず豊前坊も参詣した。『大分縣地方史 21 号』に所収された「日田郡津江の代参講」によると、前津江村（現・日田市）星弘集落では毎年春秋の 2 回、代参者 2、3 名をクジで決めて参拝させた。春は英彦山市の立つ 3 月 15 日、秋には豊前坊の市の立つ旧 8 月の丑日に参詣した。前津江からは 9 里の道のりで日田の小野川沿いに登り、岳滅鬼峠から英彦山入りした。代参者の他に初参りの者数名が同行した。上宮にも参詣し、豊前坊では牛馬の安全を祈願して熊笹を持ち帰り、牛馬に与えられた。

このように牛馬への信仰が篤かったことから、豊前坊境内には江戸時代に田川6名の大庄屋によって銅製御神牛が寄進されており、農村部に深い信仰があったことが窺える。



銅製御神牛（江戸時代）

昔から英彦山権現を参詣した者は、必ず帰途に豊前坊を参詣した。江戸時代の紀行文『日本九峰修行日記』には「豊前坊といふ天狗の宮へ詣づ」とあり、『西遊雑記』では豊前坊は「名高き天狗堂」とある。天狗の堂として、英彦山の重要な行堂であった。

6-1. 神幸祭（豊前坊丑日祭）にみる歴史的風致

高住神社は、一般には牛馬の神あるいは農業の神として信仰されてきた。万物成就を祝って行われる高住神社の神幸祭は、古くは丑祭りといい、8月初旬丑の日に行われてきた。『添田町誌』によると、高住神社の神幸祭は、江戸時代から豊前坊秋の大祭として知られる。秋に行う神幸祭はこの祭りだけで、氏子のみならず牛馬蕃息を願う遠近の村人が寄り合い、相撲や牛馬加幣（牛くじ）などで大いに盛り上がったと云われる。

現在、9月の第二土曜、日曜の2日間に改められ、本物の仔牛が贈呈されていた牛くじ景品の特賞は、牛の置物へと代替されている。

また、牛くじは一般に販売されるものとは別に、氏子である英彦山地区の家々に講員として配られる札が駕輿丁札と共に配られ、英彦山の秋の風物詩となっている。



牛くじ案内告示（高住神社）



氏子に渡される駕輿丁札と牛くじ札

高住神社は、『英彦山神社記録・英彦山の建築』には元和9年（1623）に小倉藩主細川忠興公、鍋島勝茂公によって豊前窟に神殿、拝殿、瑞籬が建立寄進されたことが示されている。現在境内に当時の豊前窟の扁額がある。その後幾度か佐賀藩主鍋島家等によって営繕されてきたが、文政（1818～29）年中に現地に遷座した。神殿は岩窟に向拝1間余りの建物をはめ込んで、入母屋造、破風銅板葺の5間規模の拝殿で覆っており、平成12（2000）年に拝殿が改築された。



高住神社

また境内の石鳥居は元禄10（1698）年、青銅の神牛は天保9（1839）年にともに五穀豊穰、牛馬・家内安全を祈願して、田川郡の大庄屋六人が建てたもので、現在でも農業の神と崇敬篤く、九州一円から農業・牛馬安全の参詣を集めている。また火伏せの神とも知られ、火難除のお宮としても名高い。

高住神社の神幸祭は、初日、午後1時から神社内で祭典祓いを行った後、午後2時に神輿発輦が行われ、氏子によって担ぎ出される。この神輿は六角形の蓮華輿様を成していて、修験道時代の神仏習合の名残とみられる。駕輿丁役は高住神社紋の入ったハチマキをして、上下白衣を着る。ひとつの担ぎ棒に4人計16名で担いで、参道を勇壮に下る。昔は英彦山住民総出の駕輿丁役が交代で馬場から惣持院谷、別所谷を練り歩き、英彦山町から参道を下り、御旅所に辿り着いた。



神社から担ぎ出る神輿



氏子によってお下りする神輿

高住神社の鳥居下まで降りると、そこから別所谷を通って、午後3時に銅鳥居の下の勢溜に行き、銅鳥居をくぐって、御旅所に着輦する。

御旅所に着くと神官による着座祭典の後、白衣に赤袴を着て、右手に神楽鈴、左手に幣串を持った6名の稚児が、安置された神輿前で右手に回りながら鈴を振って舞を奉納する。



銅鳥居をくぐる神輿



神輿着座の稚児舞

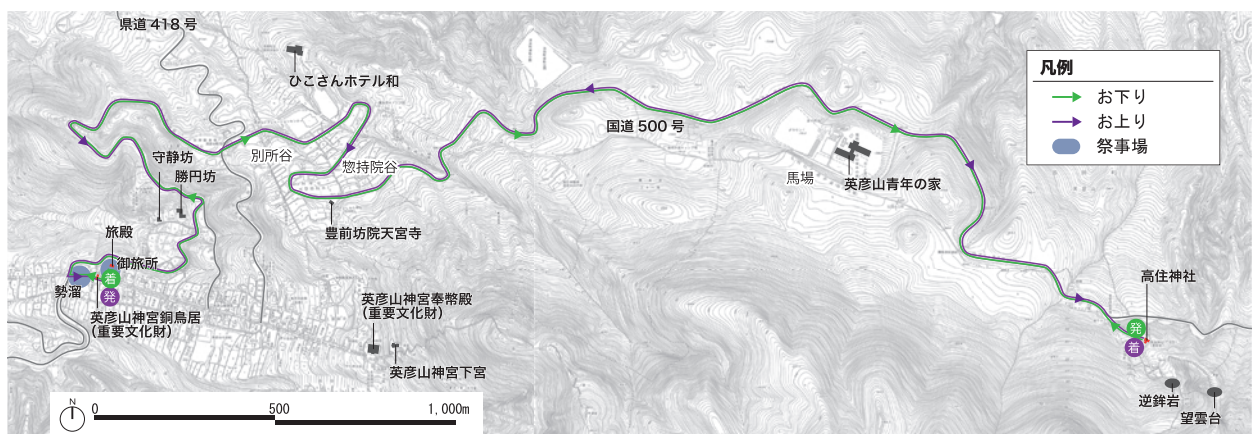


図 高住神社の神幸祭のルート

御旅所では安置された神輿に常夜灯が灯され、遅くまで参詣者がお参りとなるため、氏子総代によって夜籠が行われる。



夜籠される神輿

2日目は御旅所で牛くじの抽選会が行われる。その後の午後1時から御旅所で神輿還御祭後、前日と同様に稚児舞が奉納される。神輿は還御へと出立し、銅鳥居から再び別所谷を通り、高住神社へと還御する。高住神社鳥居からは駕輿丁役が神輿を担ぎ勇壮に駆け上る。

神輿着輦祭御霊移しの後、神社では駕輿丁役、総代による直会座が行われる。



牛くじ特賞者の賞品授与



お上り還御での稚児舞



高住神社神輿の還御

豊前坊は高住神社と名を変えた今も英彦山信仰の北の玄関としての役割を果たし、牛馬信仰の中心として農村部から多くの参詣者を集めている。高住神社から発輦する六角形の蓮華輿様を成す神輿は、高住神社の参道から英彦山神宮銅鳥居、御旅所へと長い距離を神幸する。また、牛馬信仰の中心地として、農村部から多くの参詣者を集める情景が今日も見られる。

6-2. 豊前坊採燈護摩供にみる歴史的風致

豊前坊の採燈護摩供は、英彦山に伝承されてきた修験道の修法を今日に伝えている行事である。

明治維新の神仏分離令の発布、明治5（1872）年の修験宗廃止令により英彦山修験道は廃止となった。このような法難の中、多聞坊宗徳^{たもんぼうしゅうとく}は九度の峯入りを実践し、英彦山の峰中行が根絶するのを危惧して『峰入中秘密行要口決』を子孫に託した。これは現在、奈良県吉野の修験本宗金峯山寺で保管されている。これから以降、代々多聞坊によって英彦山の修験伝統法脈が明治、大正、昭和へと受け継がれた。明治22（1889）年の『英彦山神社日記』には「八月二十三日晴…蒲池多聞参入、当秋八月十八日、宝満修験入峯修行有之」とあり、国家神道の統制下にありながら峯入修行、採燈護摩供が行われ続けたことが記録されている。しかし、軍事統制が進み、「官幣」神社である英彦山神社の神事として行うのは困難であったため、豊前坊で行われてきた。昭和52（1977）年からは11月3日に採燈護摩供と上宮登拝として高住神社祭事として慣例化し、昭和20（1945）年の終戦後に建立された修験寺院「豊前坊院天宮寺」や英彦山修験末裔の岩屋坊によって執り行われるようになった。

英彦山修験寺院「豊前坊院天宮寺」は、英彦山修験道の復活を目的として、真言宗醍醐派であった村上真行が昭和27（1952）年に豊前坊の地に寺を興した。以降3代に渡って英彦山修験道の復興に努めている。昭和52（1977）年現地に移転し、建物は間口2間、桁行4間、梁間3間の素堂で内部奥に祭壇を置く。11月3日には遠来から採燈護摩供のため参詣が多くある。



豊前坊院天宮寺

採燈護摩供は前日に、高住神社の境内地に壇木を組んでそれを檜葉で覆い包んで護摩壇を作る。中央と四方には御幣を付けた竹を立て、道場はしめ縄で結界され護摩場が作られる。11月3日当日の早朝、一行は銅鳥居から奉幣殿へと「懺悔、懺悔、六根清浄」の掛け声とともに向かい、参詣後上宮まで参拝を行う。参詣後は北岳から望雲台などの行場を参拝して高住神社へと入る。



図 高住神社採燈護摩供道場位置

道場前では法螺貝を吹き鳴らす山伏が先頭に立った行者集団が現れると「案内申す。案内申す。」と道場山伏が差し止める。ここから旅の行者が道場に入り護摩作法に加わることの許諾を得るため、山伏行者たる心得を問答する所作が行われる。この問答により正当法流の行者と認められると護摩場へと案内される。



参道に入る峯入行列



山伏問答の後、護摩場に入った一行

旅の山伏行者が着座すると「宝弓加持作法」が行われる。宝弓師が弓矢を取り護摩壇に向かう。宝弓文を唱え、その後右回りに東南西北、中央、鬼門の順に五大明王の名を唱え、6本の矢を宙に放って諸魔払いを行う。諸魔が祓われると、「宝剣加持作法」が行われる。宝剣師が護摩壇に向かい、宝剣文を唱え、その後「光」という字形に宝剣を振る。不動明王と不二の境地に入り、道場の諸天善神の守護により護摩を修めることを観念する。次に、「宝斧作法」が行われる。斧師が宝斧を持って護摩壇に向かい、同様に宝斧文を唱え、その後、壇の左右を各々3回「エイエイアバン」と掛け声を発し、斧を打ち下ろす。山神諸仏に願い、護摩に用いる薪、檜葉等を伐る所作である。このような作法で護摩場が清められると、採燈護摩供の本座へと入る。



宝弓加持作法



宝剣加持作法



宝斧作法



祭文奏上

本座では大先達が「謹み敬いて真言教主大日如来英彦山峰中三所権現…」と祭文を奏上し、護摩壇に火を渡す。大先達の合図で護摩に火が入ると読経の中、大日如来をはじめとする諸仏の智慧を得るため護摩木が壇に投げ込まれ、立ち上る炎に参詣者が熱心に合掌する。



採燈護摩作法



火渡り作法の準備

護摩焚きが終わると、大先達は護摩灰で床を作り、無病息災を祈ってこの護摩灰中を渡る「火生三昧行事」が執り行われる。採燈護摩を修行したことにより神仏の智慧を得た行者に続いて、参詣者が合掌しながら次々に香煙の中を渡っていく。



火生三昧行事（火渡り行事）



参詣者による火渡り行事

天狗が住むという高住神社豊前坊は深山幽谷に囲まれ、採燈護摩の法螺貝の音が幾重にも峰々を伝っていく。朦々と立ち上る護摩の燻煙には往時の山伏が厳しい修行で感得した神仏の息吹が今も感じられる。農耕の神として権現講、代参講で多くの参詣者が訪れた丑日祭の神輿にも人々は豊かな実りを感謝し、合掌し祈る姿が今も続けられている。

コラム4 豊前坊天狗

■英彦山の天狗

日本を代表する八天狗は、愛宕山太郎坊、比良山次郎坊、飯綱三郎、鞍馬山僧正坊、大山伯耆坊、彦山豊前坊、大峰山前鬼坊、白峰相模坊である。

その内、彦山豊前坊は九州天狗の頭領として、天津日子忍骨命が天下ったもので、役行者がこの山で修行したとき、それを祝福して出現したとされる。

豊前坊天狗は、その霊力で慈悲と幸福をもたらすとして信仰され、高住神社は今も「天狗の社」として、深く崇敬されている。

また、室町時代世阿弥が撰じた謡曲「鞍馬天狗」では御供の天狗を牛若丸が選ぶ時に「筑紫には豊前坊」と答えて諸国行脚に従えたといい、「花月」では幼子を攫う天狗として表わされている。豊前坊天狗は室町時代より数々の伝記や説話に登場し、広く親しまれてきた。

また、造形としても天狗面、鼻高面として作例も多く、江戸時代から英彦山には多くの木彫面が残されている。

今では陶面として、町内各所の工房で作られ、家内守護として英彦山みやげとして親しまれている。



天狗面が掛けられた高住神社拝殿



英彦山神宮に伝わる天狗面
(江戸時代)